

中世における正統観と南北朝期の政治思想

波田 永実

はじめに

前稿「中世初期の皇統転換をめぐる歴史認識と政道観の諸相と承久の乱を史論・物語はどう描いたか」⁽¹⁾において、承久の乱に焦点をあてつつ『愚管抄』から『六代勝事記』までの皇統転換をめぐる歴史認識と政道観を概観したが、本稿ではもう少し先まで射程を伸ばして両統迭立期から南北朝期にかけての「正統観」について、『梅松論』、『神皇正統記』、『吉田定房奏状』、『増鏡』などの分析を通して考えてみようというのが目的である。もとよりこれらは全て中世史や文学史において多くの先行研究が積み重ねられてきている。それらを改めてサーベイする目的は前稿と同じである。

第一章 『梅松論』の論理構造

『梅松論』における「天」の思想の意義

鎌倉末期から南北朝初期までの歴史を描いたものに『梅松論』がある。筆者は足利方で尊氏、直義を正当化する目的で書かれているということは異論のないところである。そうであるならば、その歴史叙述において最大のアポリアは、尊氏が後醍醐天皇に叛して幕府を開いたことと幕府の正当性を担保する北朝の正統性の証明にあるだろう。この点を『梅松論』はどのように描いているだろうかということを明らかにすることが本章の目的である。

『梅松論』は『群書類従』第二〇輯所収のいわゆる「流布本」と「京大本」、「天理大学本」、「延宝本」、「寛正本」(彰考館蔵)などの間にはテキストにかなりの異同があり、その成立時期に関しても一三五二(文和元年)から一三六一(康安元年)年の間と考えるのが妥当のようであるが、まだ定説はないようである。この一〇年間というのは観応の擾乱から尊氏の死を経て義詮が將軍職を継いだころでまだ南朝、直冬の勢力と一進一退の攻防が続いていた。ただ、本稿でも注目した『梅松論』で特筆されている少貳頼尚が南朝・直冬方から北朝・幕府側に帰順したのが一三五九(延文四)年中のことなので、少貳一族の活躍が特筆されている内容から一三五九年以降を成立期と考えることは合理的である。成立時期の問題はテキストの異同とあわせて内容の検討と不可分の関係にあり重要なのであるが、本稿では「尊氏が後醍醐天皇に叛して幕府を開いたことと北朝の正統性の評価」が問題なので主に「流布本」を用いその部分を「京大本」、「延宝本」などと校合して異なる所がある場合はその都度註記した。⁽¹⁾

一般的に『梅松論』では「天」(あるいは天下・天道・天命)という概念が重要な意味を持っていることは

つとに指摘されてきたところである。すなわち、王（天皇）は天に代わって（あるいは天の命ずるところにより）天下を治めるが、王には徳に基づく仁政・徳教を施すことが期待されている。その限りにおいて天下に王土ならざる所はなく、全ての民は王臣である。これが「天命」に基づく「王道政治」であり「王土王民論」である。しかし、「王道政治」も「王土王民論」もアプリオリに成立するものではなく、王が天命にそった仁政・徳教をおこなってはじめて成り立つものである。もし王が仁政・徳教に反した政治をおこなった場合、王臣は天命にそう仁政・徳教を王に要求し両者は対立する。それはついには放伐による革命にいたる場合もあり得る。つまり、「王土王民論」は王が王臣に対して臣従を要求するばかりでなく、王にも仁政・徳教をおこなうことを臣が求めるといふ論理的には双務的な構造を本質的に持っている。この意味において天命は王にのみ下されるものではなく、王臣にも下るものと考えられる。これが「王土王民論」と「天下」思想の相関関係の構図であるが、前述のように両者は互いに対立することもあり得る。中国の場合は易姓革命が常態であるから、「失徳」により「天命」を失った王（皇帝）は、新たに「天命」を受けた者によって放伐され新たな王朝が樹立されるというこの論理の貫徹・展開過程として歴史は描かれてきた。

しかし、日本では天皇位が異姓の者に移ることはなかったし、そうしたものだとの観念が行きわたっていた。例えば、足利家は清和源氏という王氏であるから尊氏は血は非常に遠く薄いとはいえ皇胤とはいえよう。しかし、尊氏が自ら天皇になろうとしたことはないし、いわゆる義満の篡奪計画についても現在では否定的見解が多いようだし、実際篡奪はおこななかった。つまり日本には易姓革命論は当てはまらない、あるいはそのままでは当てはめることはできない。この点を『梅松論』はどのように述べているのかも検討すべき課題である。

本稿では、まず『梅松論』における尊氏（武家）の正当性の論証と「天」（天命・天道）と「王土王民論」との関係を検討して、後醍醐方の正統観・正当性と尊氏方の正統観・正当性の論理的構造を明らかにしたい。

建武政権から離脱する尊氏の論理

周知の通り、中先代の乱に際して尊氏は征夷大將軍として東下することを後醍醐天皇に願ひ出たが拒否され、許しのないまま京を出て鎌倉に向かう。そしてそれが結果的に建武政権からの離脱につながり、後醍醐・南朝との長い内乱の端緒となった。(後醍醐との対決が不可逆になったのは、もう少し後の九州へ落ちてゆく際の光厳上皇の院宣受領の時と考える。) 同時代を描いた『太平記』では、中先代の乱に際して関東に下った尊氏が乱の収束後も鎌倉を動かず、後醍醐の意に反して自軍の武士に独自に恩賞を与えるなどの行為をしたため京への帰還を命じられるが帰還せず、結果後醍醐による追討を受けることになった時、出家してあくまで後醍醐への恭順の意を示そうとする尊氏に対して、上杉重義が尊氏、直義兄弟の誅殺を指示した偽綸旨を用意し、直義がそれを尊氏にみせて翻意させたとして^③いる。

『梅松論』では尊氏は帰京を命じる勅使に対して、尊氏はその心中を一方では「我龍顔に昵近し奉りて。勅命を請て恩言といひ。ゑいりよといひ。いつの世いつのときなりとも。君の御芳志を忘れ奉るべきにあらざれば。今度の事條々御所存にあらざと思召ける」と厚恩を受けた後醍醐への忠誠心は変わらないし、今回のことは自分の本意ではないと述べながら、他方では直義の苦戦を聞いて「守殿(直義のこと——引用者)命を落されば我有ても無益なり。但違勅の心。中にをいて更に更に思召さず。是正君の知處也。八幡大ぼさつも御かご有べし。」と、肉親の情(あるいは足利家の存続)を優先させ「自分が勅命に背く心のないことは後醍醐天皇も知る所である」と主観的な心情を吐露して軍事的対決へと進んでいく。^④ここまでの尊氏は後醍醐に対して煮え切らない曖昧な態度が目立ち、反対に直義の尊氏を担いだ武家政権樹立の強い意志が表れていることは研究史のつとに指摘するところである。

建武政権において、後醍醐は万機親裁の天皇独裁体制への服従を求め、尊氏は結果的にそれを拒否して武力

対決へと発展してゆく。ここにおいて後醍醐が尊氏（武士）に服従を要求する論理がアプリオリな形での「王土王民論」であるとすれば、尊氏はそれを超克する、あるいはそれに対抗する論理を持ち得たのであろうか。それがここでの最大の論点である。ここで筆者が後醍醐の「王土王民論」をアプリオリなものとしたことには大きな意味がある。第四章で検討する後醍醐の政道論は宋朝風の皇帝独裁体制に擬したものといわれるが、それは日本の論理に置き換えれば「（天命を受けた）正統な天皇による支配であるが故に支配の正当性の証明がそもそも不要の支配である」というものであり、「臣たるものは無条件で服従すべきである」と考えていたからに他ならない、という点が重要である。この点をもう少し詳しく検討しよう。

尊氏と同じく武家が天皇と対立して戦いとなった重要な先例はいうまでもなく承久の乱における北条義時、泰時父子である。この時、京都進撃をめぐる義時、泰時の問答を『梅松論』は次のように記している。⁽⁵⁾ すなわち、この時泰時は

国は皆王土にあらずといふ事なし。されば和漢ともに勅命を背く者古今誰か安全する事なし。…（中略）
：然らば身にあたつて今勅勘を蒙る事。なげきても猶餘り有て。天命のがれがたき事なれば。所詮合戦をやめ降参すべきよしをしきりにいさめける處に。

と「王土王民論」と「天命論」をアプリオリに受容した意見を述べたのに対して、義時は

や、しばらく有て曰。此義尤神妙なり。但夫は君王の御政道正しきときの事也。近年天下の行ひを見るに。君の御政古にかへて實をうしなへり。其子細は朝に勅裁有て夕に改り。一處に數輩の主を補らるゝ間。

國土穩なる所なし。わざわひいまだ及ざる所は恐らく關東のはからひなり。治乱は水火の戦におなじきなり。如此の儀にをよぶ間。所詮天下静謐の爲たる間。天道に任せて合戦を致すべし。

と応えている。⁽⁶⁾この義時の発言は重要な論点をたくさん含んでいる。まず、①「此義尤神妙なり」と、泰時のいう「王土王民論」と「天命論」を一般論としては肯定している。しかし、続けて②「但夫は君王の御政道正しきときの事也」と述べ、後鳥羽の政道が天命にそっていないことを批判し、そうであれば「如此の儀にをよぶ間。所詮天下静謐の爲たる間。天道に任せて合戦を致すべし」とのべて、この戦いが③「天下静謐の爲」であり勝敗は④「天道に任せて」合戦すべしとしている（しかし、実際は幕府に理がある―天道は幕府に味方するという確信がある）。つまり「王土王民論」「天命論」は一般論としては肯定できるが、後鳥羽の治世は「天命」にそうてはいないため国中平穩でないところはない。わざわいが及んでいない所は幕府の政策が及んでいからである。こうなつてしまつては天下を静謐にするために勝敗は「天道」に任せて合戦すべきである、言い換えれば、「天道」は幕府に「天下静謐」をもたらすよう要請しているといっているわけである。これが承久の乱における幕府の行為の正当性の根拠である。

そしてこの義時の発言でもう一つ注目されるのが「君の御政古にかへて實をうしなへり。其子細は朝に勅裁有て夕に改り。一處に數輩の主を補らるゝ間。國土穩なる所なし。」という部分である。「朝に勅裁有て夕に改り。一處に數輩の主を補らるゝ」とは文脈上は明らかに後鳥羽のことをいっているのだが、実は建武政権下での混乱を引き起こした綸旨万能の所領政策など後醍醐の失政を指しているといつても間違ひではない。この部分は義時が後鳥羽を批判しながら実は『梅松論』の筆者が後醍醐を批判している構造になっている。つまり、後鳥羽の「御政道正し」からず、「古にかへて實をうしな」つたので幕府が「天下静謐」をもたらすよう「天道」

が要請しているという義時と後鳥羽の間の関係が、実は尊氏における後醍醐との関係でパラレルに成立するという論理構造になっているという点が重要であると考ええる。

しかし、もう一つ大事な点は、義時は易姓革命を目指しているわけではないということである。なぜなら義時は続けて

若東士利を得ば。申す、めたる逆臣を給て重科に行べし。又御位にをいては彼院の御子孫を位に付奉るべし。御むかひあらば。冑をぬぎ弓をはづし。頭をのべて参るべし。是また一義なきにあらず」

と述べている。「もし東国が勝てば後鳥羽の子孫を皇位に付ける」とは篡奪の明確な否定である。⁽⁷⁾（ただし、後堀河天皇は後鳥羽の兄の子であり、義時は後鳥羽の皇統を意識的に排除するが。）

さらに、もし後鳥羽自身が先頭に立っていたら首を差し出して降伏せよ、これもまた大事なことである、とも述べている。つまり幕府の戦いは後鳥羽に義時討伐を「申す、めたる逆臣」を排除することがあくまで目的であって、後鳥羽本人を直接相手とするものではないというロジックである。これは建武政権から離脱した尊氏が後醍醐本人ではなく、新田義貞を討伐すべき相手に設定したロジックと全く同じである。（その時点は一三三六（建武三）年二月の光厳上皇の院宣受領後ということになる。）つまり、ここにおける後鳥羽は実は後醍醐であり、義時はすなわち尊氏であると読むことができるパラレルなロジックがほどこされている。

ここから分かることは、王が「天命」にそうした仁政・徳教をおこない得ていない場合は世が混乱するから、幕府が「天道」にそって「天下静謐」をもたらすよう要請される。それは武力によるか、そこにいたらない政治的圧力によって天皇を交代させる——どちらの場合も皇統の転換はあっても皇位は異姓には移らない——という

論理構造である。それを「擬似的易姓革命論^{ブソイド}」と呼んでもいいかもしれない。恐らくこれが明治維新まで続く天皇と武家・將軍の相互関係の確立の最初の思想的メルクマールである。これが尊氏が拠って立つ第一の正当化の論理となるのである。

興味深い点は『梅松論』の泰時の発言にみられるような『勅命』への絶対服従を要求する『王土』思想は、武家勢力の進出と共に没落の運命を辿った旧勢力がイデオロギーとして強調したものであったと考えられるのである。」との指摘があり、さらに一一八六（文治二）年の段階では『天下』思想によって『勅宣』ないし『院宣』を批判し、官軍と武力衝突を起こすような自信は未だ武家階級（頼朝：引用者）の中には育っていなかったようである。」との指摘もある⁹⁾。

鎌倉幕府滅亡の理由

では前後関係は逆になるが、ここで改めて鎌倉幕府は何故滅びたのか、その理由を『梅松論』がどのように述べているか検討してみよう。実はこれは足利幕府の武家政権としての正統性・正当性につながる重要な論点なのである。『梅松論』が正統な（当然、正当な）武家政権を是認するものである以上、頼朝創業は当然肯定され称揚されるが、それは清盛が「其功に誇て政務を恣にし。朝威を背き。惡逆無道なりし」ところを後白河が密かに院宣を下して「頼朝義兵を發して平家の一族等を誅伐せし叡慮のあまりに日本國中の惣追捕使并征夷將軍の職に補任せらる。」と説明される¹⁰⁾。しかし頼朝以降、頼家の一件は「惡事多きによりて。外祖父時政の沙汰として伊豆國修善寺に於て子細有」と述べられている点は注意すべきである。本来であれば頼朝の「余光」を享受できるはずの二代目ですら「惡事多き」時は「子細有」（將軍職を降ろされ幽閉され殺される）と述べている。では頼家を排除し殺した時政以下北条家はどのように記述されているであろうか。北条家を九代

とすることは執権の代数ではなく得宗による支配であると言っていることになるが、

皆以將軍家の御後見として政務を申行ひ。天下を治め。武藏相模兩國の守をもて職として。一族の中の器用を撰び著して御下文下知等を將軍の仰らるゝに依て申沙汰しける。…（中略）…諸侍どもに對しては傍輩の義を存す。昇進にをいては家督を徳宗と號す。從四品下を以先途として。遂に過分の振廻なくして政道を專にして佛神を尊敬し。万民をあはれみ育みしかば。吹風の草木をなびかすがごとくにしたがひつきしほどに。天下悉治りて代々目出度ぞ有ける。

と歷代得宗・執権の善政、謙讓、神佛崇敬が強調され「天下悉治りて代々目出度ぞ有ける。」とその統治が言祝がれている^⑪。しかし、続けて

然るに高時の執権は…（中略）…是より關東の政道漸く非義のきこえ多かりけり。中にも殊更御在位の事を申たがへしかば。爭天命背かざらむ。

と高時の代で政道が乱れ、特に「御在位の事を申たがへしかば。爭天命背かざらむ。」と皇位繼承で誤りを犯したことが「天命」に背くことであつたとしてゐることが重要である^⑫。ただ、この論理では時宗の代に後宇多の次ぎに持明院統の伏見天皇を立てたことが兩統迭立の発端である歴史的事実が何故か故意に無視される。そして、「殊更御在位の事を申たがへしかば」とは具体的に何をいつてゐるのかはつきりしないが、おそらく高時が後醍醐を廢位して光嚴を立てたことが「天命」に背くとされてゐると考えざるを得ない。高時が得宗―執

権の時期には、まず花園から後醍醐への譲位があったわけだが、これが「天命」に背くとされるわけではない。とすれば、次は元弘の変後の後醍醐廃位（と流罪）、光厳擁立以外には考えられない。では、これが何故「天命」に背く行為なのかについて『梅松論』は歴史上の皇位継承の原則を次のように述べている。¹³

其故は昔より受禪と申は代々の受禪を受玉ひて。御在位のときは儲君を以東宮に立給ひしかば。寶祚亂る、事のなかりき。

皇位継承は「前天皇より譲位されて践祚・即位する（受禪）か、天皇在位の時は皇太子を次の天皇に立てることで順調になされてきた」と主張するが続けて、そうではなかった問題を含む皇位継承の具体例として①壬申の乱における清見原天皇（天武天皇）、②光仁天皇、③薬子の乱における嵯峨天皇、④文徳天皇の時の清和天皇即位、⑤保元の乱における後白河天皇と崇徳上皇の争い、⑥高倉天皇の時の安德天皇即位、⑦承久の乱における後堀河天皇即位を挙げているが、「皆一旦御ゆづりの障碍たりといへども遂に正儀に歸するなり。」¹⁴と結論づけている。しかし、承久の乱では後堀河を後鳥羽の「御孫」とあえて事実と異なる記述をして「正儀に歸する」と強引に結論づけているし、光仁天皇の条では「即子細あるによりて。宰相藤原百川を誅して即位したまふ。」¹⁵とまったく事実と反する記述になっている。この部分が皇位継承のどんな論理を提示しているかについて、「障碍」がそれぞれあったこと以外に、それらが「正儀に歸する」論理は明示されていない。そして続いて⑧後嵯峨上皇の遺勅が持ち出され、前稿で見たとおり大覚寺統にのみ皇位継承されるべきところを「關東のはからいよこしまなる沙汰」で送立になったと述べられている。

しかし、『梅松論』の「後鳥羽を流罪にはしたがその孫である後堀河に皇位継承させた」ことによって皇位

継承が「正儀に歸する」ので鎌倉幕府の措置は正当化されるという論理構造は、実際は後堀河が後鳥羽の兄の子である以上、成立しない。しかも後堀河の踐祚は受禪ではなかったし、後堀河は立太子の儀を経ることなく（ただし、これは前例のない事ではない）懷成（仲恭天皇）廢位の直後に急遽踐祚したため「儲君・東宮」でもなかった。何故こうした事実には反する操作を『梅松論』はあえておこなわなければならなかったのであろうか。その理由は一つしか考えられない。それは承久の乱後の幕府の措置＝後堀河擁立が正当であったということとを強調するためである。

では、後嵯峨の遺詔が何故『梅松論』において絶対視された記述になっているのか。その理由は後醍醐在位の正統性と倒幕の正当性を強調するためであると考えられる。高時が「御在位の事を申たがへしかば。爭天命背かざらむ。」というのがポイントである。しかし、時宗が伏見を立てたことはこの文脈では前述のように何故か無視される。時宗は「遂に過分の振廻なくして。政道を專にして佛神を尊敬し。万民をあはれみ育みしかば。吹風の草木をなびかすがごとくにしたがひつきしほどに。天下悉治りて代々目出度ぞ有ける。」という代に含められる。この事実には反する記述の意味は、実際には光厳は「儲君を以東宮に立給ひし」例であり、しかも後醍醐は元弘の変の失敗で廢位、流罪になっている。その後醍醐在位の正統性は倒幕の成功という軍事的・政治的勝利による自らの復位（すなわち光厳の廢位）によって現実的には担保されている。したがって、『梅松論』における「殊更御在位の事を申たがへしかば」という「天命背かざらむ」事とは、光厳の踐祚・即位のみを否定しただけでは不十分で、両統迭立という皇位継承の原則の全面否定にならざるをえないわけである。何故ならば、後嵯峨の遺詔が絶対視される以上、後醍醐在位の正統性は揺るがない。つまり、両統迭立が有り得べからざるものである以上、光厳在位は論理必然的に否定されなければならない。そしてそれらを強引にすべて高時の所為としているわけである。

では、そうした操作がなぜ必要であり重要であるかと言えば、正統な王Ⅱ後醍醐の論旨を受けて挙兵した尊氏の倒幕（実際には六波羅探題の滅亡、ただし新田義貞による鎌倉幕府滅亡には後の義詮が名目人として参戦していた。）は必然的に正当性を得るという論理構造になっているからである。この点を次ぎに詳しく見ていこう。

『梅松論』における大覚寺統正統の論理とその意味

では、この論理で尊氏ら武士は自らの行動をすべて正当化できたのだろうか。建武政権から離脱した尊氏と草創期の幕府は終始後醍醐・南朝の敵対に苦しめられるが、その後醍醐・南朝の尊氏・幕府に敵対する正当性の根拠はその皇位の正統性の主張にあった。すなわち、正統な王による支配はアプリオリに正当である（かつ「天命」にそうている）という論理である。であるならば、尊氏の叛後醍醐の行為と幕府の存在の正当性を光厳上皇の院宣と光明天皇の尊氏の征夷大將軍補任に発する尊氏と幕府は、光厳・光明の属する持明院統―北朝の正統性を支持するのが論理的にも政治的にも一貫していると考えられるが、『梅松論』の内容はそう単純ではない。

何故なら『梅松論』は伏見、後伏見という持明院統の「此二代は關東のはからひよこしまなる沙汰なり」と断定しているからである。そして、

一の御子後深草院御即位有べし。おりゐの後は長講堂領百八十ヶ所を御領として御子孫永く在位の望をやめらるべし。次に二の御子龜山院御即位ありて。御治世は累代敢て断絶あるべからず。子細有に依りてなりと御遺命あり。（長子である後深草院はまず即位するべし。退位した後は長講堂領百八十ヶ所を御領

としてその子孫は天皇即位をあきらめるべし。その次ぎに亀山院が即位して、天皇位は累代にわたってその子孫が継いで断絶があつてはならない。それは子細があつての後嵯峨院の遺命である。」

と後嵯峨の遺詔を大覚寺統の主張のままに是認しているからである。したがって、伏見、後伏見の治世の「然間二の御子亀山院の御子孫御鬱憤有」(その間は二男の亀山天皇の子孫には鬱憤があつた。)という状況であつたが、

又其理に任せて御宇多院の御子後二条院後在位あり。…(中略)…又此君非義有に依て。立かへり後伏見院の御弟萩原新院(花園天皇)御在位有り。…(中略)…亦御理運に歸す。後宇多院の二の御子後醍醐御在位あり。…(中略)…如此後嵯峨院の御遺勅相違して。御即位轉變せし事。併關東の無道なる沙汰に及びしより。いかでか天命に背かざるべきと遠慮ある人々の耳目を驚かさぬはなかりけり。」(また、後嵯峨院の遺勅によつて後宇多天皇の子の後二条が天皇位についた。…(中略)…またこの天皇には非義があつて(病で早世して)、後伏見天皇の弟の花園天皇が即位した。…(中略)…しかしまた御理運に帰して後宇多天皇の二男の後醍醐天皇が天皇位についた。…(中略)…このように後嵯峨院の御遺勅に反して天皇位が変転したのは鎌倉幕府が無道なる沙汰に及んだからである。こうしたことがどうして天命に背かないことであろうか、と思慮深い人々の耳目を驚かした。)

とあるように、大覚寺統の皇位継承は「理に任せ」たもの「理運に歸」したもののだが、「後嵯峨院の御遺勅相違し」た「關東の無道なる沙汰に及びしより」皇位が轉變(両統迭立)したという認識を示している。⁽¹⁸⁾さらに

続けて、亀山の子孫の在位が連続すれば諸国の武家がその天皇を擁護して幕府が危うくなる、なぜなら承久の変で後鳥羽を流罪にしたことを亀山が不当だと深く考えて関東を討ち滅ぼしたいと思っているが、時節がまだ到来しないだけなので関東は現在も安全ではない。これに対して、後深草の子孫は天下の為に関東の安寧を願っている、と伏見天皇在位のころ密かに関東に何度も伝えた。こうしたことからいわゆる文保の和談がはかれた、と述べている。⁽¹⁹⁾

そして、後醍醐在位の時に大覚寺統から吉田定房が、持明院統から「日野中納言の二男の卿」（日野俊光）が京鎌倉間を往復して皇太子問題が交渉されたが、『梅松論』はこの時の定房の発言といわれるものを詳しく記している。それは皇位継承問題と所領問題が絡み合っていた。すなわち、吉田定房は「後嵯峨の遺勅によって、後深草の子孫は長講堂領を管領した以上、亀山の子孫が歴代皇位を継承することに間違いあつてはならないところに関東の沙汰として迭立がたびたびおこなわれ皇位の行方が定まらない。∴（中略）∴後宇多の次子後醍醐が譲りを受けて元応元年から元弘元年に至る在位は後嵯峨の遺勅が定めた通りのところであつたのに、元徳二年に持明院の皇子（量仁）が立太子した。これは以ての外のことである。そもそも後醍醐は神武天皇の再来といわれているほど優れた方なのに、（関東は∴引用者）卑しい身分のものとして天下の位を定めることをしらず、かつ後嵯峨の明確な遺詔をやぶることは天命がどのようになることであろうか」と主張したと述べている。⁽²⁰⁾さらに、「一〇年で皇位を替えるという規程を定めるならば、持明院統の天皇が一〇年在位の時は、治世と長講堂領と二つながら手に入れて満足であろう。しかし、大覚寺統が皇位にない時期にはどこの所領で維持すればいいのであろうか」と所領問題を持ち出し、「持明院統が在位している一〇年間は長講堂領を大覚寺統に渡すべきである」とまで述べている。⁽²¹⁾そして、最終的には

數ヶ度道理を立て問答に及ぶといえども。是非なく持明院の御子光嚴院立坊の間。後醍醐院逆鱗にたへずして元弘元年の秋八月廿四日。ひそかに禁裏を御出有て山城國笠置山へ臨幸あり。

と元弘の後醍醐拳兵のやむを得ぬ動機を量仁（光嚴）立太子にあつたと述べている。⁽²²⁾

以上をまとめると、『梅松論』は、皇統に關して後嵯峨の遺詔を絶対視し、それが後深草の皇統には長講堂領を与えたので以降皇位繼承を諦め、龜山の皇統にのみ皇位繼承させよというものであつたにもかかわらず、幕府は後深草の子孫に皇位繼承させ、以降迭立を原則とした。それは「關東の無道なる沙汰」によるものであり不当である。そして後醍醐の在位は後嵯峨の遺詔の実現であつたのに、その皇太子に持明院統の皇子が立てられたことに後醍醐が怒り心頭して笠置に立て籠もつたとしている。

しかし所領の問題については、龜山は長講堂領と並ぶ王家に伝領した膨大な莊園群である八条院領をすでにかなり強引なやり方で相続しているし、それ以降も大覺寺統は室町院領や七条院領もかなり相続しているので、後醍醐の段階で大覺寺統はその依つて立つ経済的基盤である所領を充分獲得しており、それが後醍醐拳兵の大きな原因というのには無理がある。まして定房がそうした事情を知らないはずはない。

筆者は前述のように『梅松論』が両統迭立期に關して大覺寺統の主張を全面的に認めて、高時（幕府）の処置を「無道なる沙汰」としていることの意味を問うた。それは『梅松論』が皇位繼承を迭立させた鎌倉幕府の行為を「天命」にそわないもの（＝「無道なる沙汰」）であり、後醍醐を正統な王と認め、その倒幕を「天命」にそつた正当な行為であると認めていることに他ならないことを明らかにした。しかし、周知のようにこの企ては失敗し、後醍醐は廢位され隱岐に流される。この点について「今度は後嵯峨院の御遺勅を破て。如此の義に及ぶ條。天命もはかりがたし。いかゞ有べからんと覚えし。此君御科なくして遠嶋に移され給ふ。」⁽²³⁾と再び

後嵯峨の遺詔が持ち出され、後醍醐の隠岐遠島が「天命」にそむく不当な措置であること、その理由として後醍醐には罪がないことが主張されている。そして、隠岐脱出について「然に君今度隠岐國を出給ひし事は知臣の謀にもあらず。只天の與奉るにて有ける。」²⁴と後醍醐が「受命」の天皇であり、その行動が「天命」にそっていることを強調する。

では何故こうした立場を『梅松論』は採ったのであろうか。それは、後醍醐を「受命の王」とすることは、「受命の王」にして正統な王²⁵後醍醐の論旨を受けて倒幕に参加した尊氏の行動の正当性を証明することに他ならないからである。

さらに注意すべきは『梅松論』に登場する尊氏は最初から「將軍」と記されていることである。周知のように尊氏は丹波の篠村で論旨を受けて挙兵するが、そこを「抑將軍は關東誅伐の事。累代御心の底にさしはさるゝ上。：（中略）：既に勅命を蒙らしめ給ふ上は。時節相應天命の授所なり。」²⁵と述べているところが重要である。傍線をほどこした「既に勅命を蒙らしめ給ふ上は。時節相應天命の授所なり。」は後醍醐の論旨を受領して尊氏にもたらした細川和氏と上杉重能が挙兵の正当性を尊氏に述べているところであるが、つまり、尊氏にも「天命」が授けられたと述べているのである。

しかしながら、これまた周知のごとく「受命の王」たる後醍醐は尊氏を征夷大將軍には任じていないし、任じる気もなかったことは事実であり、両者の最大の対立点であった。しかもさらに重要な点は『梅松論』のどこにも北朝光明天皇による尊氏征夷大將軍補任にふれたところがないということである。これらのことから、『梅松論』がアプリオリに尊氏を「將軍」と記していることは、それが「時節相應天命の授所なり」とされているからであると考えることができる。つまり尊氏は『梅松論』においては最初から「天下靜謐」をもたらしべき「受命の將軍」として登場しているのである。

では「受命の天皇」と「受命の將軍」との関係はどう説明されるのか。後醍醐に叛した尊氏の行為を正当化することを困難にするのではないか。次にこの点を検討してみよう。

建武政權の成立とその正当性については「元弘三年の今は天下一統に成しこそめずらしけれ。君の御聖断は延喜天曆のむかしに立帰て。…（中略）…實に目出度かりし善政なり。」と評価される。⁽²⁶⁾しかし、しばらくして「爰に京都の聖断を聞奉るに。記録所決断所ををかるゝといへども。近臣臨時に内奏を経て非義を申断。綸言朝に變じ暮に改りしほどに諸人の浮沈掌を返すがごとし。」⁽²⁷⁾という状態を指摘する。ここが先の承久の乱の時の、「朝に勅裁有て夕に改り。」とされたところと照応していることは先述のとおりである。こうして、いよいよ公家方と武士の対立騒乱の記述に入っていくことになる。そして、ここが後醍醐の正当性喪失の出発点となることが重要である。

次に『梅松論』は決定的な対立点を示す。それは「抑累代叡慮を以關東を亡されし事は武家を立らるまじき御為なり。」⁽²⁸⁾と述べられているところである。そもそも武家政權の否定が累代（後鳥羽、後醍醐）の叡慮であるのに、直義が太守として鎌倉におり東国武士がそれに帰服して京都に帰服しなかったので（まして尊氏が征夷大將軍になれば）、後醍醐の公家一統の本意にとつては「今になつてはそれは益なし」と考え、武家は武家で公家に恨みをふくむ者は頼朝のように天下をおもいのままにすることを考え、そのため公家と武家の相容れない争いに元弘三年も暮れた、としている。⁽²⁹⁾そして護良没落の一件は「宮の御謀叛眞實はゑいりよにてありしかども。御科を宮にゆづり給ひしかば。鎌倉へ御下向とぞ聞えし。」⁽³⁰⁾と本当は後醍醐が護良を使喚して尊氏をなき者にしようとしていたとしている。次いで、中先代の乱に際して鎌倉に下つた尊氏に後醍醐の勅使がきて帰洛を命ずると、大御所（尊氏）は急ぎ帰ると応えたが、下御所（直義）がこれを止めたと述べている。⁽³¹⁾そして前項で述べた「我龍顔に昵近し奉りて。勅命を請て恩言といひ。ゑいりよといひ。いつの世いつのときなり

とも。君の御芳志を忘れ奉るべきにあらざれば。今度の事條々御所存にあらざと思召ける」という尊氏の発言につながっていくのである。

そして比叡山に逃避した後醍醐と新田軍を破って攻め上がる尊氏軍の様子と内裏焼亡が描かれる。特に重要と思われるのは、内裏焼亡が秦滅亡時の咸陽宮、阿房宮焼亡と、寿永三年の平家都落ちが後醍醐の比叡山逃避にたとえられていることである。これ（秦王朝の滅亡Ⅱ内裏焼亡と安徳都落ちⅡ比叡山逃亡）は後醍醐の正統性と正当性がすでに失われたことを示している。つまり、論理的には支配の正当性の喪失が天皇の正統性の喪失の原因となる構造になっている。こうして『梅松論』上巻は終わる。

持明院統正統への唐突な転換

続いて『下巻』は、北畠顕家率いる出羽陸奥軍と新田軍が合流して京都の足利軍は破れ九州へと落ちてゆく場面から始まるが、ここで、赤松円心の有名な発言が記されている。^②

凡合戦には旗を以て本とす。官軍は錦の御旗を先だつ。御方は是に對向の旗なきゆえに朝敵に似たり。所詮持明院殿は天子の正統にて御座あれば。先代滅亡以後定而叡慮心よくもあるべからず。急に院宣を申くだされて錦の御旗を先立らるべき也。」

ここで注目すべきは次の二点である。第一は「御方は是に對向の旗なきゆえに朝敵に似たり」と、一般論として「官軍は錦の御旗を先だつ」とはいいながら、自分たちを「朝敵」そのものではなく「朝敵のようだ」と称していることである。「官軍」「朝敵」というある種絶対的な觀念が既に相対化されていることはやはり

重要な点であると考えられる。そしてその理由を「こちらには対抗する名分（旗）がないからだ」と主張する。そして第二に、円心の発言の核心として「持明院殿は天子の正統にて御座あれば」とかなり唐突に持明院殿（光厳上皇）が正統な天子として再登場する。ここは先にみた『上巻』における大覚寺統・後醍醐正統論とどうしても齟齬をきたしているところであり、このアクロバティックな転換の具体的説明はないので、『上巻』最後の「秦王朝の滅亡と安德都落ち」にたとえられた「内裏焼亡と比叡山逃避」（すなわち、正当で正統な王は京都にいないなければならないということ。）で後醍醐の正当性・正統性が失われたと解釈せざるを得ないのであるかと考える。後醍醐は元弘の乱で幕府により廃位され流罪にされて、光厳が鎌倉幕府によって擁立されたわけであり、そもそも光厳は立太子からして「正統なる」後醍醐から見ると「以ての外」であって、そのことに後醍醐は「逆鱗にたへずして」武力倒幕に踏み切ったとされているわけであり、まして隠岐脱出、倒幕が成功して後醍醐が復位し、光厳の即位は無効とされたわけであるから、『上巻』のどこからも光厳の正当性・正統性は導き出せない。

とすれば、ここにおける「持明院殿は天子の正統にて御座あれば」との唐突な記述は、以後の尊氏の正当性の出発点であり、その後の行動の正当性を確実に担保するものとしてあえて『上巻』の内容との論理的整合性を無視して、最後の内裏焼亡と比叡山への逃避をふまえて挿入されたものとしなければなるまい。

武家政権の正当性――「天下は必源家の代たるべし」

以下『下巻』では、尊氏は下関で出迎えた少貳頼尚らと合流して九州に上陸し、多々良浜の合戦で菊地武敏ら後醍醐与党勢を撃破して頼勢を挽回し反転西上、湊川の決戦へとつながっていくわけであるが、ここで注目すべきは九州で少貳頼尚の父親妙恵が菊地勢との戦いに敗れて自害した様子が語られている場面である。そこ

で描かれている妙恵の基本的立場は

わが君の為に忠節を盡さば。子孫永く二心存すべからず。：（中略）：我將軍の御為に命を奉る。追善更に有べからず。頼尚を始一族家人生残りたらむ者共は心を一にして忠節を盡して將軍を御代に付奉るべし。

とあるように、將軍（尊氏）との堅い主従関係に基づく忠誠心の表明であり、自分はそれに殉じて戦って死ぬが子供たちは自分の死を乗り越えて將軍に忠誠を尽くし將軍の世にせよというメッセージである。⁽³³⁾ 重要な点は、それが前代の鎌倉殿と関東御家人の関係と全くバラレルものとして描かれていることである。それは、妙恵の奮戦と自害は、頼朝挙兵の時の三浦義明の最後と重ねられることにより明らかとなる。ここでは義明は子供たちに対して「我源家累代の家人として老の命を君に奉り勲功を汝等に施さん事悦のうへの喜也。一所にて命を捨てからず。義明は此城にて防戦べし。汝等は君の御方に参じて忠を致すべし。」と述べている。これは妙恵の場合と全く同じ主従関係に基づく忠誠心の表明である。そしてその後に決定的な一節が語られる。「天下は必源家の代たるべしと涙を流して念頃に申ければ」と三浦一族の死をもいとわぬ奮戦により頼朝に天下を取らせた次第が語られるのである。こうして「此故に三浦忠孝を今に残すものなり。妙恵も將軍の御為に命を捨て義明が振舞に少もかはるべからず。」ということから、頼朝創業と尊氏創業が等価であり、ともに忠臣の奮戦によって幕府創業がなる次第が語られるのである。つまり、頼朝創業は前代の既定の嘉例であり、アブリオリに称揚されてしかるべきものであるので、尊氏創業も同じくアブリオリに肯定されるという論理構造になっている。それを実現したのはともに將軍に忠誠を尽くした臣下の奮戦であるとされる。まさに「天下は必源家の

代たるべし」ということである。ここにはそもそも後醍醐と争うことの是非や葛藤などはすでに見られない。

『梅松論』の記述方法の特徴と意味

ここであらためて『梅松論』のこうした記述の仕方の特徴に注目すべきであると考ええる。筆者はそれを「時制の無視」であると考えている。先に、高時が「天命」に背いて光厳に皇位継承させたことにふれたが、そもそも事の始めは時宗が後深草への配慮から伏見を立太子させ踐祚させたことにあるが、『梅松論』では時宗のこの措置にふれてもいないし批判もせず、高時にすべての責任をかぶせている。そして尊氏が始めから將軍として記述されており、征夷大將軍補任の記述がないことを尊氏が「受命の將軍」であることを示すためと述べたが、それらも広い意味では「時制の無視」である。それが最も端的に表されるのが少貳妙惠の記述である。尊氏が九州に転戦した時には歴史的事実としては征夷大將軍にはまだ補任されていないわけであるから、少貳妙惠、頼尚父子や九州の武士たちとの間に厳密には主従関係は成立していない。言うなれば、少貳親子は尊氏の与力勢であった。にもかかわらず、「我將軍の御為に命を奉る。追善更に有べからず。頼尚を始一族家人に残りたらむ者共は心を一にして忠節を盡して將軍を御代に付奉るべし。」と少貳一族の尊氏への忠誠をことさから強調しているのは、実は後の恩賞のためであるが、それは「結果」からみての將軍尊氏への「奉公」の「時制の無視」による強調である。『梅松論』成立の時期については確定できないが、おおよそ義詮が將軍の時期であろうことは異論がない。北朝は後光厳、南朝は後村上の時期と考えられる。いまだ不安定な時期ではあるが、幕府はすでに成立し、二代將軍の時期である。この少貳妙惠の記述は、実際には子の少貳頼尚は觀応の擾乱では足利直冬に呼応して尊氏、義詮とは対立するので、それ以前の時期の資料に基づいて記述されたと思われる。帰順以降は幕府・北朝側に立つ武士として、あたかも頼朝と鎌倉御家人の主従関係のように「時制」を

無視してすでに成立していた主従として登場することに大きな意味があったと考えられる。

もう一つあえて付け加えるならば、前述のように後堀河を後鳥羽の孫とした例や『下巻』のはじめに光厳が正統な天皇として唐突に再登場したように、明らかに歴史的事実に関する操作や論理矛盾が無視された記述によって武士側の正当性の「一貫性」が強引に意図されていると考えられることである。

後醍醐の「天命」喪失と尊氏「受命」のロジックなぜ『梅松論』は正成を評価するのか

以下、西上するまで少貳頼尚らの奮戦振りが描かれているが省略し、『太平記』でもよく知られた湊川で楠一党が奮戦し自害した後で、『梅松論』は正成の有名なエピソードを語っている。すなわち、正成は湊川出陣前に後醍醐に対して、新田義貞を切り捨て尊氏と和睦するよう進言したわけであるが、これは後醍醐側近の公家たちから非難、嘲笑され後醍醐も受け入れなかったが、この時、なお正成は言葉を継いで「天下の武士は悉く尊氏に従っている」と述べた後、

其證據は。敗軍の武家は元より在京の輩も扈從して遠行せしめ。君の勝軍をば捨奉る。爰を以徳のなき御事知しめさるべし。

と後醍醐の「徳」がすでに失われていると指摘していることが重要である。⁽³⁶⁾さらに、正成は元弘の時には国中が助けてくれたが、それは「皆心ざしを君に通奉し」たからである。しかし今度は河内和泉両国の守護として軍勢を催促したが

親類一族猶以難洪の色有如斯。況國人士民等においておや。是則天下君を背ける事明らけし。」

と天下（の民）が後醍醐に背を向けていると断じている。³⁷「天」の声は「民」の口を通して現されるとされているので、ここは後醍醐が「失徳」の故に「天命」を喪失したと読むべきであろう。

この有名な一連のエピソードは、正成の後醍醐への衷心からの忠誠心と武士としての冷徹な分析力、判断力を賞賛する文脈で理解されてきたわけであるが、この発言の画期的意味は、むしろ後醍醐の「失徳」とすでに「天命」が失われたことを正成の口を借りて言わせているところに見出すべきであろう。『梅松論』が正成に高い評価を与えているのは、敵方である足利勢でさえその武士としての生き方、能力を賞賛していることといわれているが、実際は後醍醐第一の忠臣でさえその「失徳」と「天命」喪失による敗北を確信しているということを知っているからであると考えるべきであろう。言い換えれば、ここにおける正成は尊氏による「天下静謐」を予言する役割を与えられていることが重要なポイントであると考ええる。

ここまでみてきたことをまとめると、①「天命」を受けた正統な王Ⅱ後醍醐は「天道」に背いた鎌倉幕府を亡ぼした。それは「天命」にそう行為であったが、後醍醐は新政の失敗によって「天命」を失った。他方②尊氏は「天命」を受けた正統な王Ⅱ後醍醐に従って倒幕で大きな役割を果たしたが、その行為は当然正当である。さらに尊氏は新政の失敗によって引き起こされた社会的混乱を鎮める「天下静謐」の「天命」を受けた「受命の將軍」である。そこで、③尊氏は「天命」を失った「失徳」の王Ⅱ後醍醐（当然正統性は喪失している）に替えて、「正統」な王Ⅲ光厳の院政下で幕府を開き「天下静謐」をもたらしした。そしてその「天下静謐」の具体的内容とは、④正当な幕府による支配の下、正統な皇統を保持することである。それは後醍醐天皇に叛いて幕府を開いた尊氏の正当性を主張するものであると同時に、尊氏の創業は頼朝創業を受け継ぐものであり、足

利幕府は正統な武家権力であるということを弁証するものである。以上が『梅松論』の示す尊氏正当化（同時に幕府の正統化）の論理構造である。

では反対に、後醍醐・南朝側の正統性のロジックがどのようなものであったかを次ぎに検討しよう。

第二章 大覚寺統における正統概念『神皇正統記』と『吉田定房奏状』の検討を通して

親房における「正統」概念の基本構想と「正理」の発現形態

南北朝期に南朝の正統性を主張した『神皇正統記』（以下『正統記』と略記）の歴史記述の特徴は、皇位継承の流れの中に「正統」を「発見」し、そのつながりを「正理」として正当化する一貫したロジックを構築していることにある。この点は後で検討する『吉田定房奏状』と一番異なっている親房独特の歴史観、正統観である。そもそも王政は本来、血縁関係で継承されていくものであるから親（王）から子（多くの場合は正妃の生んだ嫡子）へと直系相続されていけば問題は起きないのであるが、歴史はそれが常態でなかったことを示している。中でも一つの王統が何らかの理由で断絶した時が問題となる。日本の場合皇位が異姓に移ることはなかったので、ここで検討するようにその時には新たな皇統が「発見」されて皇位継承がなされていくわけであるが、その「発見」された人物・皇統が「正統」でありその皇位継承が「正当」であること、そしてそのプロセスにはある一貫性があることを「証明」しようとするものが『正統記』なのである。（親房においては正統性と正当性は即時的に一体・同一のものであると観念されていると考えられる。）

『正統記』は光孝天皇以前は「一向上古也。」とし、仁和年間（光孝の治世）から以降を「スエノ世」すなわち近現代ととらえ詳しく記述している。¹そして、陽成天皇から光孝天皇への継承において、「此天皇（陽成）

性惡ニシテ人主ノ器ニタラズ」という理由で摂政の良房が廢位し、光孝天皇を擁立した理由について「俄ニマウデテ見給ケレバ、人主ノ器量餘ノ皇子タチニスグレマシケルニヨリテ」と記している。⁽²⁾つまり、光孝天皇は陽成廢位にあたって、皇胤である多数の諸皇子の中から良房によって「発見」されたのである。

そしてその後、「神代ヨリ繼體（皇位繼承のこと―引用者）正統ノタガハセ給ハヌ一ハシヲ申」すならばそれは「我國ハ神國ナレバ、天照太神ノ御計ニマカセラレタルニヤ。」という有名な一節が続く。⁽³⁾そして、歴代天皇の中に神の教えに反するものがあれば在位が短い、また最後には正しい道に帰っても一時は運悪く沈淪して振るわないこともある。これは全て自分が犯した罪であると述べる。（これは一種の仏教的な因果応報論である。）そして仏教の論理で「十善ノ戒力ニテ天子トハナリ給ヘドモ、代々ノ御行迹、善惡又マチ／＼也。カ、レバ本ヲ本トシテ正ニカヘリ、元ヲハジメトシテ邪ラステラレンコトゾ祖神ノ御意ニハカナハセ給ベキ。」と述べて、古代よりの皇位繼承の経緯について記していくが、その記述が陽成―光孝の皇位繼承の一節の後に出てくるのは、陽成―光孝の場合のような皇統の直線的な不連続（筆者はこれを皇統転換と呼ぶ）が起きた場合、その皇位繼承の正統性と正当性を論証するためであると考えられる。

「正理」はいかに発現し「発見」されるか

では、その皇位繼承が「正理」であることは何によって証明されるのであろうか。皇統転換があつた天皇の記述を検討してみよう。

その大きく採り上げられた最初の例が周知のように武烈―繼體の場合である。「武烈惡王ニテ日嗣タエマシシ時、應神五世ノ御孫ニテ、エラバレ立給⁵⁾。」と述べている。何故、武烈の皇統が断絶したかといえど「惡王」であるからであり、繼體が何故選ばれたかという「群臣皇胤ナキコトヲウレヘテ求出奉ロシウヘニ、ソノ御

身賢ニシテ天ノ命ヲウケ、人ノ望ニカナヒマシ／＼ケレバ^⑥と記している。同じ趣旨の記述が「此天皇ノ立給シコトゾ思外ノ御運トミエ侍ル。但、皇胤タヘヌベカリシ時、群臣擇求奉キ。賢名ニヨリテ天位ヲ傳給ヘリ。天照太神ノ御本意ニコソトミエタリ。」と継体記にもある。これを整理すると①皇胤であること、②「ソノ御身賢」であること、③「天ノ命」を受けていること、④「人ノ望」にかなう、こうした条件を備えた皇胤が「発見」されたと述べている。さらに親房は武烈皇統の始祖である仁徳の名が大鷦鷯（おほさざき、みそさざいのこと、「おほ」は美称）で小鳥であり、継体の五代前で継体皇統の始祖隼總別（仁徳の弟で即位していない皇子）の名前が大鳥なので「隼ノ名ニカチテ、末ノ世ヲウケツギ給ケルニヤ」「名ヲツクルコトモツ、シミヲモクスベキコトニヤ。ソレモヲノズカラ天命ナリトイハバ、凡慮ノ及ベキニアラズ」、とそれぞれの名前の元になった鳥の大きさにまでその皇位継承の正統性の根拠を求め「ソレモヲノズカラ天命ナリ^⑧」としている。ここに中世人親房の心性が認められる。

ただ、ここでいう「天ノ命」が普遍的な意味での「天命」を指すのか、天照、正八幡といった皇祖神の意思を指すのか、言い換えれば両者を本源的に同一とみなしているのか否かは議論の余地がある。またその人物が③「天命」を受けた者（つまり「受命の王」）であるということは、①・②・④の条件を備えた者が皇位継承してはじめて「発現」する。言い換えれば、つまり③「天命」が①・②・④を備えた人物を「発見」させるという論理構造になっている。

次に称徳―光仁における天武系から天智系への皇統再転換について「大友ノ皇子ノ亂ニヨリテ、天武の御ナガレ久傳ラレシニ、稱徳女帝ニテ御嗣モナシ。又政モミタリガハシクキコエシカバ、タシカナル御讓ナクテ絶ニキ。光仁又カタハラヨリエラバレテ立給。コレナン又繼體天皇ノ御コトニ似玉ヘル。シカレドモ天智ハ正統ニテマシ／＼キ。第一ノ御子大友コソアヤマリテ天下ヲエ給ハザリシカド、第二ノ皇子ニテ施基ノミコ御トガ

ナシ。其御子ナレバ、此天皇ノ立給ヘルコト、正理ニカヘルトゾ申侍ベキ。」と述べ、光孝の例は継体の例に似ているとしている。そして「陽成惡王ニテシリゾケラレ給シニ、仁明第二ノ御子〔二〕テ、シカモ賢才諸親王ニスグレマシくケレバ、ウタガヒナキ天命トコソミエ侍シ。カヤウニカタハラヨリ出給コト是まで三代ナリ。人ノナセルコトトハ心エタテマツルマジキ也。」と結論づけている⁽¹⁰⁾。

ただ、この場合はいささか微妙な問題を含んでいる。何故なら、天智の嫡系である大友皇子は「アヤマリテ天下ヲエ給ハザリシ」（誤りを犯して天下を得ることができなかった―壬申の乱に敗北したことか）ものであり、皇位は天武皇統に移り称徳にいたった。しかし、称徳は「政モミダリガハシク」不徳の天皇であり、女帝で直系の皇位継承者がいなかった。そのため、天智の第七子の「施基ノミコ御トガナシ。其御子ナレバ、此天皇ノ立給ヘルコト、正理ニカヘルトゾ申侍ベキ。」とされているのである。つまり、光仁の父親である「施基ノミコ御トガナシ」が「正理ニカヘル」理由とされているのである。天智の余慶は大友の不徳で絶えたはずなのに、天智の第七子「施基ノミコ」は「御トガナシ」でその子の光仁が即位して「正理」に反ったとされているということは、光仁の正統性は直接的には父親である「御トガナシ」の「施基ノミコ」によって担保されているという論理構造になっている。

ここで重要な点は、光仁の正統性はそもそも天智の孫であるからアプリオリに担保されているという論理構造にはなっていないことである。何故なら、天智の嫡系（大友皇子）は不徳のゆえに絶え、天智の後に皇位継承した「天武・聖武國ニ大功アリ、佛法ヲヒロメ」たが、称徳の代で「皇胤マシマサズ、此女帝ニテタエ給ヌ⁽¹¹⁾。」という事情から光仁が即位したわけである。まさに天武は親房も認めるように「世ヲシリ給シヨリアラスヒ申人ナカリキ。」⁽¹²⁾という「偉大な」天皇であった。しかしこの皇統も称徳が道鏡を重用し政が「ミダリガハシ」かった余殃で絶えた。そこで親房は「シカレド天智御兄ニテマズ日嗣ヲウケ給。ソノカミ逆臣ヲ誅シ、

國家ヲモ安シ給ヘリ。」と、天智が兄で先に即位したことで、乙巳の変で蘇我氏を亡ぼした功績を挙げて、ここでようやく天智の正統性について「コノ君ノカク繼體ニソナハリ給」うと主張する。つまり、天智が「繼體ニソナハリ給」うこと、即ち正統な天皇であることは、天武皇統が断絶した際に光仁が即位し、その父「施基ノミコ」が「御トガナシ」で「正理にかえり」、その皇統がそもそも天智が兄であることと蘇我氏を亡ぼした功績により「発見」されるのである。その際、光仁を「発見」したのは「参議百川」¹³⁾である。つまり、天智の正統性は光仁の正統性を「論証」するところで述べられなければならないわけである。つまり、光仁↓施基皇子↓天智と、この皇統の正統性の論証手続き（論理）は逆転（倒立）しているのである。これは重要な論点と考えるのであるが、詳しくは後述する。

このように、皇位継承が直系相続で連続しない時、「御トガナシ」の皇子の子、孫、あるいは「正統」な天皇の他の皇子の子が傍系から「発見」されて、その皇胤が「賢才」で「人ノ望ニカナヒ」という条件を備えて皇位を継承することを親房は「正理ニカヘル」と積極的に肯定する。しかも、それは「人ノナセルコトトハ心エタテマツルマジキ」ことであり「ウタガヒナキ天命トコソミエ侍シ」と評価していることから、前述の①、②、④の条件を兼ね備えているものが③「天命」を受けた者として「発見」されるのである。あわせて、親房において「天命」とは皇祖神である天照、正八幡の意志と本源的に同一視されていると解すべきであろう。

陽成—光孝の継承ロジックは前述の通りである。

四条—後嵯峨については、「泰時ハカラヒ申テコノ君ヲスヘ奉リヌ。誠ニ天命也、正理也。土御門院御兄ニテ御心バヘオモダシク、孝行モフカクキコエサセ給シカバ、天照太神ノ冥慮ニ代テハカラヒ申ケルモコトハリ也。」¹⁴⁾と泰時の選択が天照太神の神意を代行した（逆に、天照太神が泰時に後嵯峨を「発見」させ選ばせた）ことが「正理」であるとしているが、後嵯峨の正統性は父親である土御門が兄であることと心ばえがいいこと、

そして孝行であったことによって担保されている。

これまでみてきたように、皇統が兄弟相続の状態にある時、一方の始祖が兄であることは正統性の根拠として天智と土御門のところで持ち出された論理であるが、何故か後深草―亀山のところでは無視されて、後深草は「后腹の長子ニテマシ／＼シカドモ、御病ヲハシマシケレバ」⁽¹⁵⁾というように正妃の長男だが、病弱が理由で弟の亀山に譲位したと述べている。事実には反しているが、これは親房にとつては亀山が正統でなければならぬ、ことからの必然であったという他はない。つまり、論理的一貫性には欠けていることになる。

以上のように、その時の現天皇の皇統が断絶した場合には、上記の四条件を備えた人物を見つけ出し皇位につける、つまり「天照太神、石清水」（王家の宗廟神）の神意が発現して「発見」されることにより「正理」に反るとされる。しかし、それは『正統記』においては、それだけでは皇位継承の正統性は担保されない。何故、それが「正理」であり正統な皇位継承なのかをどのように論証しているのか、次ぎに検討したい。

「正理」を裏付ける「世数」

周知のごとく『正統記』では、歴代天皇は皇位継承の順番を示す代数のみ与えられた天皇と、あわせて世数も与えられた天皇がいる。ために応神天皇の項をみると「第十六代・第十五世」と数えられている。代数と世数が一致していないことと、応神の次ぎに世数を与えられている継体天皇は「第二十七代、第二十世」となっていて、両者の間の天皇は代数のみで世数は与えられていない。『正統記』では代数は皇位継承の順番を示しているだけなので、問題は両天皇の間の世数が五世とんでいることである。その理由は、継体は応神の五世の子孫であるからである。実はこの代数と世数の関係が親房における「神皇正統」（人皇正統）の系譜を「正理」で表す最も重要なファクターなのである。

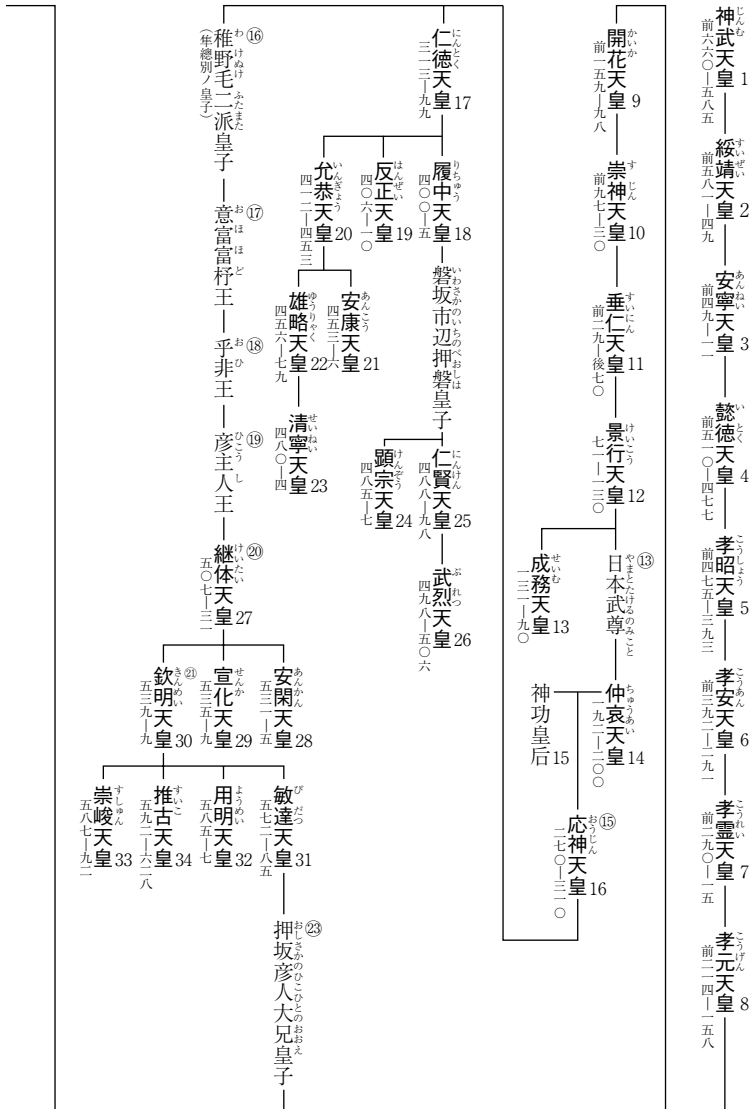
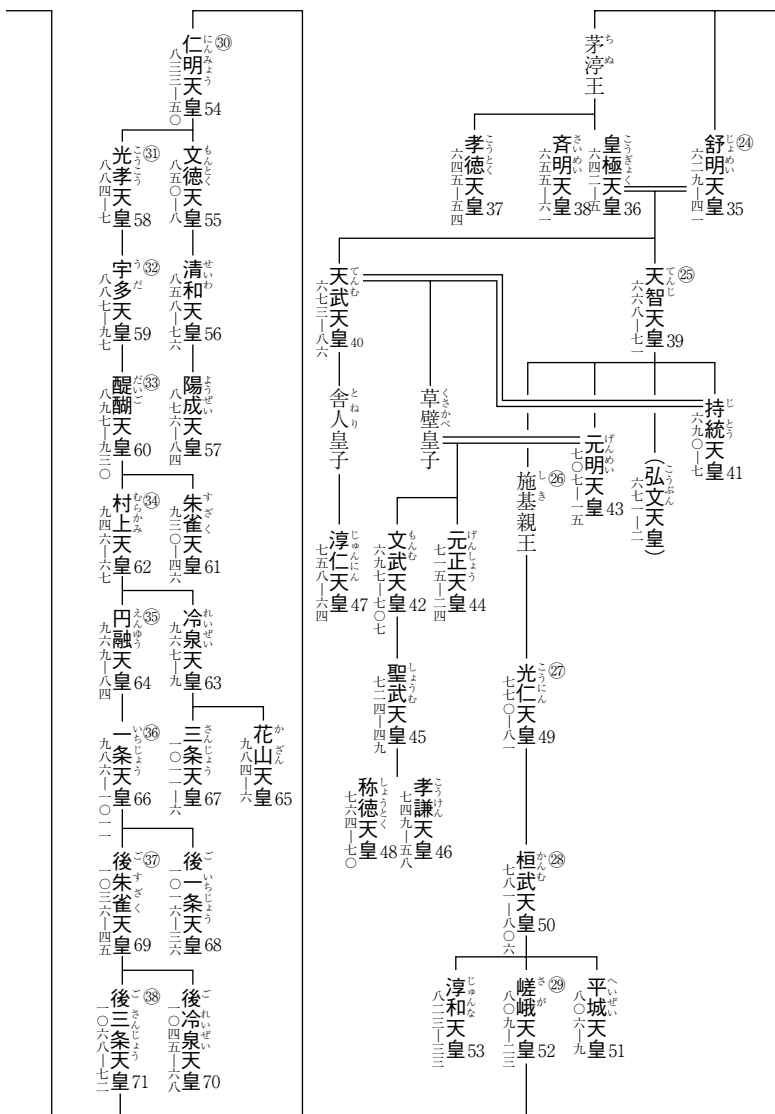
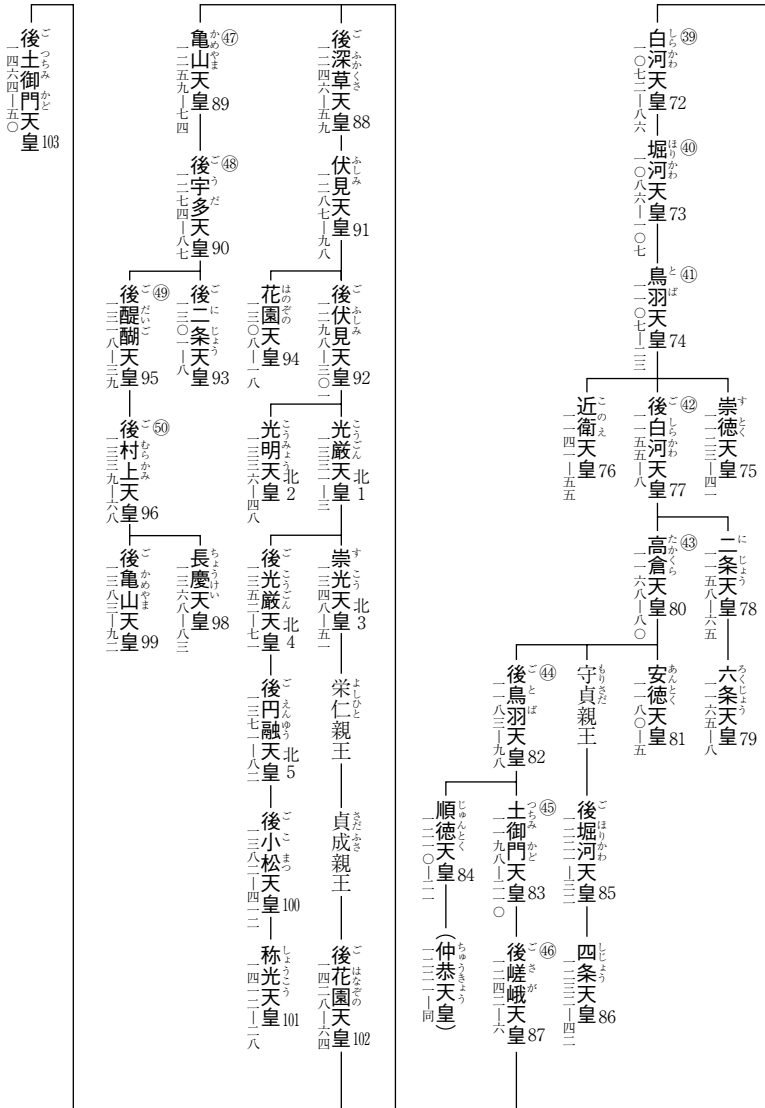


図 I 神皇正統記による天皇系図

中世における正統観



(宮内庁の系図を参照し作製した。即位していない皇子にも世数をほどこした。○数字が世数を表わす。親房は弘文天皇と仲恭天皇を歴代とはみなさず、神功皇后が即位したと見なしている。)



神武（人皇第一代・第一世）から景行（第十二代・第十二世）までは代数と世数は一致している。何故なら親から子へと「代ノママニ継体シ給。」¹⁶すなわち代々直系相統されて連続しているからである。したがって『正統記』では、ここまでは世数は記されていない。記す必要がなかったからである。しかし第一三代成務は、景行（第一二代・第二二世）の第四子で皇位継承したわけであるから、本来第一三世であるはずである。しかし親房は「日本武尊日嗣ヲウケ給フベカリシニ、世ヲハヤクシマシシカバ、此御門立給。」¹⁷とのべ、本来なら日本武尊が即位して第一三代、そして「当然」第一三世となるべきであったが早世したので、弟の成務が即位したという認識を示し、第一四代の仲哀は日本武尊の第二子で、景行の孫で、成務を嗣いだので一四世となるのである。この場合、結果的に代数と世数が一致するが実は、継体以前に仲哀ではじめて皇統が転換している。つまり成務の子孫には皇位は伝わっておらず（したがって成務には世数は付されない）、即位していない日本武尊が第一三世と認識され、その子仲哀が以降の皇統の元（始点）となっていることを第一四代・第一四世は表していることになる。（以降、第は省略）そして『正統記』は『日本書紀』と同じく神功皇后を歴代に数えているので一五代となり、仲哀と神功皇后の子である応神は一六代であり一五世となるのである。代数と世数がずれているのはこうした皇位継承の事情を反映しているわけである。

そして、次の皇統転換は武烈―継体で起きた。武烈の皇統は断絶し応神天皇（一六代、一五世）五世の子孫である継体が即位して二七代、二〇世となったわけである。応神の次の代は仁徳（二七代）であるが、その皇統は武烈（二六代）で断絶するので仁徳に世数は与えられない。一方、応神の「第八皇子隼總別ノ皇子」（仁徳の弟）は即位していないが、その子孫である継体が即位し以降その皇統が続くので一六世と認識され、「其子大迹ノ王、其子私斐ノ王、其子彦主ノ王」は同じく即位していないが一七世、一八世、一九世と認識される。これは日本武尊の場合と同じ論理である。したがって本来一九世である彦主ノ王の「其子男大迹ノ王」¹⁸

継体は二〇世となるわけである。天皇制の歴史には、兄弟相続による迭立状態が何度もくり返し現れるので、この代数と世数の関係は一見複雑に交錯して展開しているように見える¹⁸⁾。

では親房は一体何のために皇位継承の歴史を代数と世数で表したのか。それは世数を与えられた天皇のみが「神皇正統」(人皇正統)の皇位継承の本体「幹」であると考えるところであり、代数のみの天皇は時々その「幹」から生えた「枝葉」であると考え、というのが親房『正統記』の基本構想だからである。

しかもこれは私見によれば、倒立して構想されたのではないか、ということが最も重要なポイントであると考えている。先に光仁の正統性についてふれたところで、天智の正統性は何によって担保(正当化)されるのかについて私見をのべた。つまり『神皇正統記』は皇位継承のプロセス(すなわち「歴史」)を逆から読むとその構想の政治的意図がはっきり分かるのである。

いうまでもなくその最後は、親房が仕えていた南朝第二代の九六代後村上天皇であるが、五〇世とされている。その父後醍醐は当然九五代で四九世である。しかし後醍醐以前の花園には第九四代、遡ってその前の後二条には九三代、後伏見九二代、伏見九一代とあり代数のみで世数は与えられていない。ちなみに、後二条以外は対立していた持明院統の天皇であり、後二条は後醍醐の異母兄である。さらにその前の後醍醐の父後宇多には九〇代、四八世と代数と世数が与えられており、祖父の亀山は八九代、四七世と代数、世数両方が与えられている。そして亀山の兄後深草は八八代と代数のみで、兄弟の父親後嵯峨は八七代、四六世と両方与えられている。その後嵯峨について親房は「抑此天皇正路ニカヘリテ、日嗣ヲウケ給シ¹⁹⁾」と皇位継承の正統性を認めている。

そこで、この所で世数を与えられている天皇をあらためて抜き出すと、後嵯峨(四六世)、亀山(四七世)、後宇多(四八世)、後醍醐(四九世)、後村上(五〇世)となり、大覚寺統の中の後醍醐の皇統のみが正統を嗣

いでいることを表している。つまりこの皇統のみが皇位継承の本体Ⅱ「幹」であり、持明院統はいうまでもなく、後宇多によって大覚寺統の正嫡とされた後二条も「幹」ではなく「枝葉」であると主張していることになるわけである。

言い換えれば、『正統記』において、アプリアリな正統性が与えられている後村上は正統な天皇である後醍醐から受禪して即位したので必然的に正統な天皇なのであるというロジックになっている。ここで最も重要な点は、後醍醐が正統になるように世数をさかのぼっていくことにある。なぜならば『正統記』が書かれた時点で後村上の正統性は厳密に言えば担保されていないのである。その理由は後村上はその子に皇位をいまだ継承させていないからである。この意味で、後醍醐の正統性の証明が最も重要なポイントとなる。したがって、後醍醐と後宇多との間に即位した天皇はすべて「正統」から外されなければならないし、後深草と亀山という同母の兄弟では後宇多の父亀山が正統でなければならぬ。後深草の皇統（持明院統）は始祖である後深草が世数を与えられていない以上、その子孫の皇位継承は何代続こうと「枝葉」とみなされるということを『正統記』は主張しているのである。

こうして樹木系統図のように、「人皇」第一代神武から世数を与えられた天皇を下から上に向かったたどっていけば、「正理」による「正統」な皇位継承の道筋が「幹」として表される。そして代数のみの天皇は、たとえ仁徳や天武、持統、聖武のように歴史の中で特筆されるべき天皇であっても、その時々「幹」から横に生えた「枝葉」として表される。そしてその論理必然的に、代数を与えられていない、すなわち即位していない皇子が皇位継承の過程に「世」として認識され、即位した「正統」な天皇と天皇の間を前後でつなぐ「環」として機能したというのが『正統記』の基本構想なのである。その意図するところは後醍醐―後村上の皇統Ⅱ南朝が正統な王権であることを論証することであった。ただし、即位していない皇子の世数は『正統記』には

明記されない。正統な天皇の間の世数がとんでいることから、「環」としての即位していない皇子の存在が認識されていることが分かるだけである。では、なぜ親房は即位していない皇子に世数を与えて皇位継承の「正しい」系譜を明記しなかったのかについてはなお検討の余地があるが、本稿では今後の課題としたい。

この項の最後に、なぜ『正統記』では正統性の証明論理が倒立しなければならないかという問題をもう一度考えてみたい。それは親房によれば、ある皇統が断絶した場合、皇胤の中から賢才にして、人の望にかなう皇子が「発見」され（天命を受け）、これが天皇に即位してはじめて「正理に反る」からである。継体は五世遡って「発見」されたわけであり、応神との間の四人の即位していない皇胤が正統な天皇である応神―継体を「正理」でつなぐ「環」として機能したのである。「正理」でつながれてはじめて、「正統」となるのである。『正統記』は、それをたどらなければ「継体」＝「皇位継承の正統性」が担保されない論理構造になっているのである。

ちなみに、四六世後嵯峨の踐祚は泰時のはからいによることは周知の事実である。四条天皇が死んだ時、順徳天皇の皇子忠成王が有力候補であった。九条道家も外戚関係から忠成を天皇に推したのだが、泰時がはからって後嵯峨を皇位につけたと記している。²⁰つまり、後嵯峨も後高倉皇統断絶をうけて、一世遡り泰時によって「発見」されたわけである。この場合その理由は前述のとおり父である土御門が兄で心ばえが良く孝行であったことから、ということになる。しかし重要なことは、土御門の正統性は後嵯峨の踐祚・即位とその後の直系の子孫の踐祚・即位によつてはじめて確定したということである。土御門―後嵯峨の皇位継承は二人は親子であるから、間をつなぐ世＝「環」は存在しただけである。土御門は八三代、四五世で後嵯峨は代数はとんで八七代（間に順徳、後堀河、四条が入る。仲恭はこの時代は歴代には数えない。）だが、世数は四六世と連続しているわけである。

以上が北畠親房の『正統記』における正統性証明の論理である。そこには「後醍醐―後村上の皇統（南朝）

が正統でなければならぬ必然性」が込められていたといわなければならない。しかし同時に、歴史的事実として後小松の時の南北朝統一により南朝は北朝に「吸収」され、正統の象徴とされた三種の神器も北朝に接収され、皇位は以降北朝のみに継承されていくから、『正統記』のロジックをそのまま当てはめれば亀山から後亀山までの天皇は「正統」ではなくなってしまう、という論理的矛盾も内包していたといえる。従って『神皇正統記』のロジックを是とするならば、正統な王朝は後亀山で断絶し、後小松以降は「新王朝」の成立ととらえることになるであろう。

『吉田定房奏状』にみる政道観と正統観

北畠親房にもまさる信頼を後醍醐から受けていたのが吉田定房であった。定房は大覚寺統と後醍醐のために様々な活動をしてきたが、その一つに一般に『吉田定房奏状』⁽²⁾といわれる後醍醐に宛てた意見書が知られている。それは、武力倒幕の不可（時期尚早）を主張している点や、「王は仁をもつて暴に勝つ」ことを主張している「徳治論」などが注目され従来から議論されてきた。ただ、この『奏状』は現存のものは写しであり、紀年も記されていないことから何時書かれたのか判然としていない。しかし、それが書かれた年月日が問題なのは、『奏状』が武力倒幕の時期尚早を説いているわけであるから、後醍醐が何時からそれを考えていたかを確定する大きな要素となりうるからである。これまで『奏状』が書かれた時期については、松本周二、村田正志の元徳二（一三三〇）年説が最も早い時期に提起されたものであるが、佐藤進一は本文中の「革命」に注目して革命甲子の正中元（一三二四）年の正中の変の直前説を唱えた。次いで、村井章介は本文跋文から『奏状』は現存のもの（改稿）の他に初稿が存在したと考えられることから、元応二（一三二〇）年に初稿が執筆されたと主張した。佐藤説と村井説は『奏状』の書かれた時機から判断して、後醍醐がかなり早くから武力倒幕を

考えていたという立場になる。それに対して、河内祥輔、呉座勇一などは正中の変は持明院統あるいは幕府によるフレームアップで、実際にはなかったという説（したがって、そんなに早い時期に武力倒幕を考えていたはずはないので佐藤説、村井説は成立しないという説）の立場に大きく別れているようだ。⁽²²⁾

本稿では時期の問題には行論の關係で私見を述べたいが、より大きく問題としたいのは『奏状』にあらわされた定房の思想、あるいはもっと大きくいえば鎌倉末期の政治的な思想状況である。

『奏状』は冒頭で、「国家草創の事。叡念議あるに似たりといへども、天命いまだ知らず、時期測りがたし」⁽²³⁾と述べ、武力倒幕は天命・時期ともに機が熟した（その時が来た）とは確信をもっていえない。和漢の故事について自分の考えを述べて、「敢て十分の逆鱗を犯す」⁽²⁴⁾と、これが天皇への「練奏」であることを前置きして本論に入っている。本稿では以下、仮に番号をふって跡づけたい。

①「一 王者仁を以て暴に勝つ事」

これは特に孟子に言及して暴政の不可を進言している点に注目すべきであろう。具体的には秦の始皇帝、魏の曹操、晋の司馬懿、宋の劉裕、齊の肅道成、梁の肅衍、隨の楊堅は「みな草創の主たりといへども、子孫永く血食せず。これみな兵革を以て固めとなし、暴虐を以て基とするが故なり。」とし、逆に漢の高祖、後漢の光武、唐の太祖は「みな先王の道に遵い、仁愛の心を抱く。社稷各々数百年、孟子の言葉、あに徒然ならんや。」と述べている。⁽²⁵⁾「孟子の言葉」とはこの項の冒頭の「至人の道、ただ仁を先となす。仁の為躰、殺さざるを基となす。」の部分を目指す、それは『孟子』『梁惠王篇』からの引用をふまえていると思われる。ただ、『孟子』からの直接の引用ではないので、定房が何によってここを書いたかは判然としない。

②「一 民の力役を費さざる事」

ここでは秦の始皇帝が大土木事業を起し隨の煬帝が離宮を作り遊び暮らしたことを「なほこれ驕逸の甚だ

しきなり、なんぞいはんや軍旅の事に於てをや」と述べ、まして戦を起こすことに反対している。⁽²⁶⁾

③「一 人の死命を重んずる事」

ここでは「王者は万民の父母なり。天下を以て家となし、民庶を以て子となす。」とし、罪もない人民を戦陣で死なせることは慈父のすることではない。天下がまだ定まらない間に戦争に駆り出されて死ぬ民の数はいかほどであろうか、と述べている。⁽²⁷⁾

④「一 天の時は地の利にしかず、地の利は人の和にしかざること」

ここでは再び孟子に言及している。「公孫丑篇」からの引用で、こちらは正確な引用である。そして天下は百のうち九〇は武家が有しているし、武勇は一騎当千である。どうして畿内の赤ん坊のような武士で屈強な関東武士に対抗できようか、とストレートに武力蜂起の不可なることを説いている。⁽²⁸⁾

⑤「一 黄帝征伐の事」

黄帝は命をさかなかった蚩尤を征伐したが、現在関東の武士は天理に逆らうきもちはない。これが武力倒幕不可の理由の一である。⁽²⁹⁾

⑥「舜その三苗を服する事」

苗民が服従しないので舜がこれを征伐した、しかし成功しなかった。ついに禹の献策をもちいて舜は文徳を修めて苗民を服させた。宮殿に昇る東西の階で羽の舞を舞うとはこのことである。これが武力倒幕の不可の理由の二である。⁽³⁰⁾

⑦「湯、桀を取る事」

殷（商）の成湯が夏の桀王を討った。それは成湯に徳があったからだ。しかし今、関東のわざわいのきざしはみることができない。万民の苦しみも未だ聞こえてこない。そんな時に微弱な王民で強大な武力を持つ関東

を討つ事はできない。これが不可の理由の三である。³¹⁾

⑧「武王、紂を放つ事」

ここでは紂の悪事を列記して失徳を示し、「ここに文王受命の君あり」と周の姬昌（文王）が天命を受けた事を記し、その死後武王（姫発）は「聖明の主」であり孟津で諸侯と盟約して紂王討伐の軍を起こした。このように天命を革めるのが今かといえ、閩東にわざわざのきざしはみえない。そのことは天皇にも聞こえてくる。これが不可の理由の四である。³²⁾

ここまでは『孟子』や『史記』、『漢書』などの古典の故事を引きながら、後醍醐に武力倒幕の不可なることを練言している。特に易姓革命に何度も言及していることは注目される。

さらに本稿では、『奏状』の⑨「一 本朝の時運興衰の事」と⑩「一 仙洞の聖運・武家の権威・その期あるべきこと」の内容を特に詳しく採り上げたい。というのも、それは短い分量ながらも当時の公家の思想状況を知ることができるとともに、定房が大覚寺統と後醍醐の正統性を主張する論理が露わになった内容であるからである。

⑨「一 本朝の時運興衰の事」であるが、次のように述べている。³³⁾

異朝は紹運の躰すこぶる中興多し。けだしこれ異姓更に出づるが故のみ。本朝の利利天祚一種なるが故に、陵遅日に甚だしく、中興期なし。これ聖徳の覩見したまふところなり。なかんづく保元の後、源平遞ひに国権を専らにし、皇威漸く損ず。元歴年中、右大将頼朝の卿、天下を平定して、国邦を并せ吞む。承久の後、義時の朝臣専ら国柄を持す。通三・儲貳の廃立、高嶮槐・大樹の黜陟、事みな武威より出づ。今の時、草創の叡念もし時期に叶はざれば、忽ちに敗北の憂あらんか。天嗣ほとんどここに尽きなんや。本朝の安否この時にあり。あに聖慮を廻らさざらんや。（中国の王朝の継続のすがたをみるに、易姓革命に

よる「中興」がおこなわれてきたが、そのわけは異姓の者が出て新しい王朝を創始するからである。日本の国王は一姓のため（皇位が異姓のものに移ることがないため）「中興」を期待することができず次第に衰えた。これが最も優れた知恵のみのところである。特に、保元の乱の後、源平が互いに権力を独占し、天皇の權威がだんだん傷つけられてきた。元暦年中に右大将頼朝が天下を平定して、全国を統治した。承久の乱の後、義時がもっぱら政治権力をにぎった。天子・皇太子の廃立も、大臣や征夷大將軍の官位の上げ下げもみな幕府の決定である。今この時に、幕府を倒し新たな政治を始めようとする天皇の考えが、もし時機を得なければ、たちまち敗北してしまうおそれがある。そうなってしまうえば、天皇のあとつぎはほとんどここに尽きてしまうだろう。日本の行く末はこの時にかかっている。どうして天皇が深い配慮をめぐらさないことがあつていいものだろうか。）

これは、日本では中国のような易姓革命による「中興」がなく次第に衰えていくことを指摘した一節であるが、その理由が天皇の姓が一種であること（すなわち易姓革命がないこと）に求めている点に注目すべきである。しかし、保元の乱以来、武士が力を持つようになり、頼朝が天下を統一したが、さらに承久の変で、執権義時が天皇も皇太子も決定し大臣や征夷大將軍の官位も左右すると認識している。

『奏状』は、しかし、もし倒幕に失敗したら易姓革命があるいはそれに近いことが起こってしまうので後醍醐の熟慮と自重を促しているわけである。この文脈のポイントは「今の時、草創の叡念もし時期に叶はざれば、忽ちに敗北の憂あらんか。天嗣ほとんどここに尽きなんや。」との一節であり、それは易姓革命の可能性を示唆している、あるいは「正統」な皇統が断絶する危険性を指摘していると読む事ができる。

この時期に易姓革命の可能性に言及したのは一人定房のみでなく、花園上皇の『誡太子書』でもその恐れを

指摘していることは周知のことである。ただ花園上皇は、「だから天子たる者はよく徳を修めなければならぬ」と甥にあたる皇太子量仁親王（光厳天皇）に教諭しているわけである。他方、定房は現政権を支える者として、武力倒幕に失敗した場合を想定して「正統」な皇統の断絶を心配しているわけである。定房にとって正統な皇統の断絶は易姓革命に等しい事態であったであろう。両者のむいている方向は異なっているのだが、両統迭立期の朝廷貴族層に易姓革命が起きるかも知れないという危機感が一種の皮膚感覚のように共有されていたことは注目されてよい。

『奏状』は続いて⑩「一 仙洞の聖運・武家の權威・その期あるべきこと」において皇位継承の正統性を主張している。この項は光仁天皇以降の皇位継承について次のように記している。³⁴

光仁俗を馭して後、皇胤すでに一統。平城・嵯峨・淳和昆弟三人、皇位を履むといへども、天下仁明の余裔に帰す。天曆の皇胤、冷泉・円融各々兩三代、遞ひに揖讓の義ありといへども、天下円融に帰す。しかりよりしは以降、或ひは舅姨、或ひは兄弟の皇統、時々出づるといへども、始終遂に一家に入る。これ本朝の故実のみ。寛元の聖統、龜山院を以て正統とするの条、天下これを知る。しかるに後深草院、不慮三四代に及ぶといへども、始終定めて当代の皇胤に帰さんか。けだし天に二日なく、地に二首主なきが故なり。兼てはまた三世の将は、道家の肆むるところなり。関東天下の兵馬元帥の権、すでに七八代、定めて日月盈蝕の期あらんか。兵革を用ゐずして、暫く時運を俟つ。これ大義ならくのみ。（光仁天皇が世を治め、天智系、天武系に別れていた皇胤が天智系の一統に帰した。その後、平城・嵯峨・淳和の兄弟三人が、それぞれ皇位を継いだ。その後は嵯峨の子仁明天皇の子孫のみが皇位を継承している。その後、村上天皇の皇胤で冷泉天皇、円融天皇の兄弟が皇位を継いだ。そして二人の子が三代にわたって互いに皇位

を継承した。互いに平和的に皇位を譲り合ったが、天下は円融天皇の皇胤の一統に帰した。それより以来、あるいは舅や姨あるいは兄弟の皇統が時々出たことはあっても結局は一つの皇統に収斂している。これは我が国だけに特有の事実である。後嵯峨天皇の皇統は龜山天皇をもつて正統とするということは天下の知るところである。しかるに、後深草天皇の皇統が思いもかけず三四代続いたが、結局当代（後醍醐）の皇胤に一統するであろう。なぜなら天に二つの太陽がないように、この地上には二人の天皇があつてはならないからである。また、祖父、父、子供と三代続いて将となることは道家の戒めるところである。鎌倉幕府が兵馬を率いる権力はすでに七八代続いており、定めて日月の満ち欠けの時期も来るであろう。軍事力を用いて幕府を倒すのではなく、今しばらく時運の到来を待つことが大義というものである。）

大略、こうした内容であるが「兵革を用ゐずして、暫く時運を俟つ。これ大義ならくのみ。」とあるように、前段の「一 本朝の時運興衰の事」を受けて、結論としては後醍醐に今は武力倒幕の時期ではないことを諫言しているのであるが、そこで主張されている正統観にやはり着目すべきであると考ええる。

ここでは政争や兄弟相続などによる皇統の分裂とその後の皇統の収斂について、①光仁天皇（天武皇統が断絶し天智皇統が復活したこと）、②仁明天皇（三人兄弟相続したが、嵯峨→仁明の皇統が以後続くこと）、③円融天皇（兄弟相続して迭立状態が続いたが円融の皇統が続くこと）の例を挙げている。この三人は『神皇正統記』では代数と世数を与えられている「正統」な天皇であることはいうまでもないが、何故そうなったのかについて『奏状』には特に説明はない。『神皇正統記』では正統に反る理屈と世数をふることに意味があったわけであるが、『奏状』では円融天皇以降は「或ひは舅姨、或ひは兄弟の皇統、時々出づるといへども、始終遂に一家に入る。これ本朝の故実のみ。」と、日本の特殊性として「始終遂に一家に入る」と、皇統分裂しても

一つの皇統に収斂することが結果論的に説明されているだけである。

しかし、『奏状』がここで本当に主張したいことは、「寛元の聖統、龜山院を以て正統とするの条、天下これを知る。」という一節であると考えられる。「寛元の聖統」とは後嵯峨皇統を指す。したがってその正統が龜山である以上、「後深草院、不慮三四代に及ぶといへども、始終定めて当代の皇胤に帰さんか。」という結論となる論理必然的な主張となっている。しかもその根拠は「天に二日なく、地に二主なきが故なり。」というアリオリなものである。しかし、ここにおける龜山正統の「天下これを知る」根拠は実際には後嵯峨の遺詔以外にはあり得ないことは明らかである。総じて大覚寺統では後嵯峨の遺詔が絶対視されていたが、『梅松論』のところでも出てきたように、吉田定房が関わるとされる史料の文脈でそれが特に重要な役割をはたしている点にも注目したい。

実は『奏状』のこの項では大覚寺統の正統性を主張している他に、もう一つ重要な論点がある。それは、⑩項のタイトル「仙洞の聖運・武家の権威・その期あるべきこと」（上皇の聖運も幕府の権威もやがては尽きる時がくる）であると思われる。では、その仙洞（上皇）とはだれで、本文中の「当代」とはだれであるのか。「当代」は文脈から考えて後醍醐以外はいない。これまで『奏状』が書かれた時期については、大きく分けて前述のように、佐藤進一説、村井章介説など、後醍醐がかなり早くから武力倒幕を考えていたことを『奏状』が立証しているという立場と、河内祥輔、呉座勇一などの正中の変はフレイムアップで、そんなに早い時期に武力倒幕を考えていたはずはないので佐藤説、村井説は成立しないという立場に大きく別れている。そこでのポイントは正中の変が実際にあったものか、幕府によるフレイムアップかというところにあるのだが、筆者は現在それに応える能力は無い。しかし、実は「仙洞の聖運も尽きる時がくる」という仙洞がだれなのか、これを考えるポイントなのではないだろうかと考えている。

前述のごとく「当代」は後醍醐で動かないわけであるから、その時の「仙洞」(上皇)とはだれのことか。それは治天の君であつた父後宇多と考えるのが当然のようであるが、必ずしもそうではない。仙洞とは退位後の天皇(上皇・法皇)の住まいを指す言葉であるから、その時期には後伏見、花園も仙洞と呼んでおかしくない。後伏見、花園の父親の伏見は一二二七(文保二)年に死んでいるので外してよいであろう。もしも『奏状』が書かれたのが正中の変の前とすれば、この二人も候補である。また、正中の変がフレイムアップでその時期に実際には武力倒幕を考えていなかったとすれば、『奏状』は内容から元弘の変前ということになり、その時期には後宇多はもう死んでいるので花園、後伏見のいずれかということになる。この中で、花園はいずれにしても該当しないと考えてよい。何故なら、「その期あるべきこと」と考える対象は院政をおこなう大覚寺統の惣領か、持明院統の惣領であるはずで、花園は持明院統の惣領ではないので外してよいと考える。したがって、時期と候補者を考えると「仙洞」とは後宇多か後伏見かということになる。後宇多の死は一二二四(元亨四)年六月二五日、正中への改元が同年一二月九日、正中の変が発覚するのが同年九月一九日であり仙洞を後宇多と考えるても時系列的には矛盾はない。

問題は後醍醐が、父後宇多の院政を「やがては尽きる時がくる」ことを願っていたかということであるが、答えはイエスである。この点、詳しく後述するところがある。しかし、元亨元(一二三二)年一二月で後宇多の第二次院政は停止されているし、何より鎌倉でその交渉にあたつたのは他でもない定房である。後宇多の院政停止・後醍醐親政開始についてはその理由ははっきりしない。筆者の仮説は後述の通りである。いずれにせよ、後醍醐の親政開始にかける意気込みは強かった。定房は後宇多の信任も厚かったが、何より後醍醐の乳父であり、強い絆で結ばれた主従であつたといつてよい。そう考えるならば、この仙洞は後宇多と考えてもよく、書かれた時期については佐藤、村井説が妥当であり、正中の変はあつたということになろう。

では次ぎに、仙洞は後伏見ではあり得ないのか、という点について考えてみよう。後醍醐は践祚したが東宮には邦良が立てられたことは前稿の通りであり、それは後宇多の意志であった。ところが一三二四年に後宇多は没しているし、邦良が早世したのは一三二六年であった。その結果、東宮には鎌倉によって後伏見の子量仁が立てられた。前章でみたように、『梅松論』によればこれが後醍醐にとつては「もつての外」のことで元弘の変の直接原因とされた。もし文保の和談（これが成立したものであったか否かは別として）の内容にそつて在位一〇年を目途に後醍醐が退位すれば、皇太子量仁が践祚し後伏見が治天の君となりその治世となることは既定のことであつた。しかも邦良が死んで量仁が立太子したのは後醍醐践祚からあしかけ一〇年のことであり、文保の和談の内容をふまえれば退位の時期が近づいていたとはいえよう。その意味で、この時点で自己を規制する両統迭立の枠組みを壊すために武力倒幕を考えた後醍醐に、定房が自重を促したのが『奏状』であるとするれば、仙洞は後伏見ということになる。つまり、たとえ後醍醐退位、量仁践祚、後伏見院政開始となつても「仙洞の聖運も尽きる時がくる」ので「結局当代（後醍醐）の皇胤に一統するであらう。」というのは文脈上も筋が通るし、時制的にも問題はない。こう考えれば、時期の点に関しては河内説、呉座説も成り立ち得るということになる。

筆者が、仙洞が後伏見で時期が元弘の変前の可能性も有り得ると考える理由は、この『奏状』が「結局当代（後醍醐）の皇胤に一統するであらう。」と樂觀的・希望的に考えていることにある。何故そうなるのかといえ、具体的には「後醍醐の皇統が正統であるから」ということになるが、それは龜山の皇統が後嵯峨皇統の正統であるから当然、後醍醐は正統であるといういささか飛躍したロジックになっている。さらにそれは、「天に二日なく地に二主なし」であるから「結局当代（後醍醐）の皇胤に一統するであらう。」という一種のトトロジのような論理になっている。これをもし仙洞は後宇多で時期が元弘の変前とすれば、「仙洞の聖運も

尽きる時がくる」とは後宇多の院政の停止ではなくて、邦良を大覚寺統の正嫡との遺詔を残した後宇多の死を定房が願っていたことになり、いささかというよりかなり不穏当な内容ということになる。なぜならこの時点では後宇多の院政はすでに停止され後醍醐の親政になっていたからである。

大覚寺統内では、後宇多皇統は亀山の末子恒明がその正統性を揺るがしたが、それは後宇多が止揚した。それにより、尊治の立太子が実現し、践祚・即位となった。すなわち、亀山↓後宇多までの正統性は太覚寺統内では確立している。しかし、後宇多は大覚寺統の正統を後二条↓邦良とした遺詔を後醍醐に残した。その邦良は践祚することなく早世したが、この皇統にはまだ弟邦省がおり邦良の子康仁もおり、それぞれ大覚寺統の正統を主張して鎌倉にも様々な働きかけをしていた。そうした事情を定房が知らないわけがない。つまり、当時、その正統性は、現職の天皇であるということ以外には担保されていないのが後醍醐をとりまく状況であった。現職の天皇といっても、その直系卑属が立太子し、践祚・即位しないかぎり、「正統性」は担保されず院政もおこなえず「一代の主」に終わってしまう可能性が高かった。

この点において、後宇多の正統性が出てこない。『後宇多の不在』が『奏状』の特徴ということになる。すなわち、後嵯峨↓亀山↓当代（後醍醐）という皇統が正統であるという主張にならざるを得ない構造になっている。次章で詳しく検討するように、後宇多を位置づければ大覚寺統内では必然的に後二条、邦良を位置づける必要はなくなる。あるいは、亀山が正統である以上、後宇多は当然正統であるということになると定房は考えていたからともいえるが、間に後二条と邦良がはさまっているため、それは後醍醐の正統性をアプリーには担保しないことになるし、後宇多の遺詔はそれを明確に否定しているのである。つまり、『奏状』には後醍醐の正統性を論証する具体的、積極的なロジックは展開されず、後醍醐が正統な天皇であり、天皇制の歴史は兄弟や血縁の複数の皇統に分裂して皇位継承されても「結局は一つの皇統に収斂している」のできつと

「当代（後醍醐）の皇胤に二統するであろう。」というトートロジーを構成している。つまり、『奏状』において後醍醐の正統性はアブリオリに主張されている、あるいは「後宇多の不在」という「意図的操作」によって後嵯峨↓亀山↓当代（後醍醐）という正統が描き出されて主張されたとも考えられる。これは後醍醐に対して肉親のような（あるいはそれ以上の）愛情とアイデンティティをもった定房だからこそ、こういう「当然」な内容になったといえるかも知れない。その定房をもつてしても後宇多の死を願うような内容を『奏状』に記すことは考えにくい。とすれば、仙洞は後伏見で時期は元弘の変の前（後宇多の死後）の時期という仮説も成り立ちうる。いずれにせよ、現状ではどちらと断定する決定的な証拠はないので結論は留保する他はない。

以上みてきたように、『奏状』には『孟子』の言及、引用が二箇所あり、やはりこの時期に朝廷における宋学の受容がそれなりに進んでいたことが政道論として一般論としては認められよう。さらに易姓革命への言及も⑦夏商革命、⑧商周革命について述べているところでもなされていることも『孟子』受容と無関係ではないであろう。それを媒介にした前稿でも指摘した「末代観」「澆季観」から大変動Ⅱ易姓革命への恐れは当時の貴族層の共通の皮膚感覚ではなかっただろうか。ただ、それは中国における易姓革命、すなわち旧王朝が武力で倒されて新王朝が成立し文字通り新たな王（皇帝）が異姓から立つということを直接的には意味しないであろう。それは自分がアイデンティファイする「正統」な天皇とその子孫が皇位から排除されるかも知れないという危機感、恐れ of 表明であったといえよう。両統迭立期はまさにその危ない状況が現実的に進行していたという認識があったであろう。

そして、『奏状』では「天命」はまだ倒幕を容認しておらず、「当代」（後醍醐）の正統性は亀山が後嵯峨の正統であることよってのみ担保されている論理構造になっている点が特徴である。そして皇統の分裂が実際にあっても「始終定めて当代の皇胤に帰さんか。」と希望的な見通しを示すのみで、その積極的な根拠は展開

されない。あえて根拠を探せば「当代が正統だからだ」、という他には見出せない、後醍醐正統に対する非論理的といつてもよい強いこだわりが『奏状』の特徴であるということになる。

そこで、次ぎに亀山、後宇多、後醍醐という大覚寺統三代の相互関係を『増鏡』の記述から概観してみたい。

第三章 亀山―後宇多皇統の相互関係の中の後醍醐天皇―『増鏡』を材料として

『増鏡』における大覚寺統の家族関係

以前、『大日本史』の歴史認識を問題にした際、目的は後醍醐天皇の評価について検討することであったが、大覚寺統の祖であり、「正統な南朝」の始祖でもある亀山天皇の評価が極めて低いことに少なからぬ違和感を覚えた。しかしその時は、儒教における普遍的な徳治論から、南朝が政治的・軍事的に敗北して皇位がつがらなかった原因をその始祖亀山の失徳（具体的には力自慢、女色）に求め、反対に現皇室の源流となった北朝の始祖後深草が嫡男で道徳的に優れていたという評価と対比させて理解し議論を展開した。そしてそれは近世初頭の儒教的価値観を表していた。

そこで改めて亀山天皇周辺の資料に当たると、亀山、後宇多、後醍醐の関係が極めて複雑に交錯し、それが皇位継承をめぐる諸問題に大きく影響していることが分かる。『太平記』とならんで『大日本史』が依拠した史料の一つに『増鏡』がある。『大鏡』にはじまるいわゆる「鏡物」は多様なエピソードを伝えているのだが、史実との境が曖昧なものも多く含まれている。両統迭立期を中心に後醍醐の隠岐脱出までをあつかっているのが『増鏡』である。その『増鏡』の中でも亀山をめぐるエピソードは豊富であり、本稿との関係で特に注目されるのが後醍醐生母忠子との不倫関係に関する記事である。

後醍醐天皇の生母は後宇多の女御であった五辻忠子（談天門院）である。五辻家は花山院家の庶流でいわば中流貴族である。忠子の父忠継は晩年に従三位参議に列し辛うじて公卿に連なった人物であるが、鎌倉末期に娘忠子の他にも、孫の経子が後伏見天皇の生母となつて重要な役割を演じている。さらにもう一人の孫の宗子も後二条天皇との間に邦良、邦省を生んでいる。この時期の中流貴族としては天皇家と密接な関係を築いたといえよう。しかしそれらのことは忠継死後のことであり、彼自身はそれらの関係を背景に重要な役回り果たすことはなかった。

問題の忠子は後宇多との間に後醍醐（尊治）を含めて四人の子をもうけているので寵姫の一人だったといつてよいであろう。その忠子がのちに後宇多のもとを去り、子供たちと共に亀山の庇護のもとで生活している。『増鏡』には忠子が亀山の寵愛を受けたことが述べられている。第一「さしぐし」に「近比は法皇めしとりて、いと時めきて、准后などきこえつるも」とある。もしこれが事実だとすれば、父親（亀山）が息子（後宇多）の妻を呼び寄せて奪った（めしとりて）ことになり、亀山と忠子の関係は唐朝における玄宗と楊貴妃の関係とパラレルとなる。さらにいえば、祖父（白川）と孫（鳥羽）の妻（璋子・待賢門院）との関係にも類似している。そしてある時期、亀山が孫の尊治（後醍醐）を手元に置きかわいがり、その即位を願つて石清水八幡に願文を納めたとされている（『神皇正統記』、『増鏡』参照）。当然それは忠子との関係が前提と考えられてきた。

そして後醍醐（尊治）と父後宇多の関係も複雑であった。後宇多は大覚寺統の嫡流を後醍醐の兄の後二条皇統として、尊治は一五歳になるまで親王宣下もなく、立太子後も尊治を「一代の主」とする意思を明確に示していたことは史料的にも明らかで今日通説的理解である。特に尊治が一五歳になるまで親王宣下がなかったということは、大覚寺統の中での皇位継承可能性が極めて低かったことを示している。それらの背景には亀山のもとに走った忠子があったからだ、というのも一因と考えられてきた。そしてそれが亀山、後宇多、後

醍醐の相互関係の解釈から結果的に概ね平仄が合っているということもあつたであらう。

事実、より一般的に広く読まれることが期待されている新書版の歴史書、例えば兵藤裕巳『後醍醐天皇』（岩波新書）では「母忠子が亀山法皇の寵愛を受けた」と述べているし、森茂暁『後醍醐天皇』（中公新書）も「忠子の背後には後宇多院ではなく後宇多院の父亀山の庇護を濃厚によみとることができ……つまり忠子は四人の皇子皇女をもうけたのち、後宇多上皇のもとを去り、その父の亀山法皇のもとに行き寵愛をうけたのである。」と述べているように、両者とも亀山と忠子の不倫関係を記述し、それが政治に与えた影響について論じている。その史料の根拠は『増鏡』と思われる。しかし、亀山と忠子の関係がそうしたものだとしたら、いかに中世の貴族社会のモラルが性的放縦に寛大であつたとしても問題視されなかつたのか疑問が残る。すでに保元の乱や承久の乱で寵姫の政治介入や不倫関係が乱の原因として指弾されていた。しかし、どうやら同時代の貴族の日記などに亀山と忠子の不倫関係に関する記述は見られないようである。つまり、これらは『増鏡』を唯一の史料の根拠にした歴史叙述であるということになる。『大日本史』が編纂された江戸時代前期において、儒教道徳が絶対的な価値観として形成されつづつあつた中で、亀山への評価が低いことはこの点からも理解できる。

実は、筆者も亀山と忠子の関係は結果的にはあつたものだと考えている。しかし、その事情の背景には検討する余地があるように思われるし、それは当時の政治過程に大きな影響を与えるものでもあつた。そこで亀山、後宇多、後醍醐の関係とその政治的影響について、それぞれの家族関係（親子関係、妃、母親、子供、兄弟関係など）をひもときながら考えてみたい。

亀山と後宇多の関係

後宇多天皇（世仁）は亀山天皇（恒仁）の第二皇子として一二六七（文永四）年一二月に誕生した。母は左大臣洞院実雄の娘で皇后佶子（京極院）。祖父後嵯峨上皇の意向で翌年、生後八ヶ月で立太子した。その二年前にはすでに亀山の兄後深草（久仁）にも熙仁（伏見天皇、母は同じく洞院実雄の娘、玄輝門院）が生まれていたが、年長の兄の子を差し置いての立太子であった。このことは大覚寺統が主張する後嵯峨皇統の正嫡が亀山↓後宇多であるとの認識の根拠となった。そして世仁は一二七四（文永一一）年一月に亀山の讓位を受け八歳で践祚した。その二年前に祖父後嵯峨はすでに死去しており、その時周知の事情で、治世は亀山と決まっていたので、亀山の院政となった。そして後宇多は一二八七（弘安一〇）年一月まで在位している。そしてこの時、正妃腹の嫡子にもかかわらず疎外されていた後深草による幕府への働きかけが奏功して熙仁が立太子し、践祚・即位して伏見天皇となり後深草が院政をしき、両統迭立の発端となった。

後宇多の在位期間は亀山の院政であったが、亀山は一二八九（正応二）年に出家している。出家後について『増鏡』の第一「さしぐし」には大略、出家直後はまことに聖僧らしく女房など侍らせていなかったが、後には在俗のころより一層女色に耽ったと述べている。亀山の女性関係は相当派手であったらしく異母妹との近親相姦も引き起こしている。⁽⁵⁾そして、晩年の一三〇三（嘉元元）年に西園寺実兼の娘瑛子（昭訓門院）との間に恒明をもうけた。これが後述のように大覚寺統の第一次分裂の原因となった。

その亀山の死は一三〇五（嘉元三）年九月であるから、大覚寺統の惣領はその時まで亀山であったことになるのか、後二条の時に院政をしいた後宇多にすでに移っていたと考えるべきなのか曖昧な所がある。黒田俊雄『日本の歴史』第八卷（蒙古襲来）では亀山の惣領を一二八九（正応二）年九月の出家までとしている。⁽⁶⁾その後は後宇多が惣領という理解である。『増鏡』第一〇「老いのなみ」には、一二八二（弘安一〇）年一〇月

ころ「御政事などもやうく譲りやきこえましなど思されつるに」とある。⁽⁷⁾この時、天皇はすでに後宇多から持明院統の伏見に替わっているから、後宇多が二一歳で「御政事などもやうく譲りやきこえまし」と記された「御政事」とは具体的には大覚寺統の惣領の事以外にはあり得ないであろう。つまりこの時までには亀山と後宇多との関係は良好であったと考えてよいであろう。

しかしこれまた周知のように、亀山は一二〇五（嘉元三）年に恒明をもうけた。恒明という諱は自身の恒仁の一字を与えたものであり、亀山の「晩年御鍾愛の愛児」（『園太暦』観応二年九月六日条）であった。さらに亀山は恒明の立太子を後宇多に承知させ、対立していた持明院統の伏見にもその旨同意を得ている。その時後宇多は、自分の子孫が天皇の器ではないという趣旨のことまで述べて亀山の意を迎えている。この時点は後二条が皇位にあり後宇多の院政期であり、後二条には邦良がすでに誕生していた。そもそも治天の君という概念は天皇家の惣領権（家長権）を意味し、天皇と惣領が一致していれば親政となり、一致していなければ院政となるというのが一般的な理解であろう。この点に関して黒田は次のように説明している。⁽⁸⁾

わたくしは、「治天下」という言葉を「政務の実権をとる者」という曖昧な説明ですませてきた。だがそういう説明ではじゅうぶんとはいわないであろう。「政務の実権」といっても、後嵯峨法皇から亀山天皇へ引き継がれたものを院政というわけにもいかず、天皇の位というわけにもいかない。いわばそういう語では表現できないある種の地位であり、権力であるからである。…（中略）…この、院政ともいえず皇位ともいえないものとは、ひとくちにいえば天皇家の家長権である。家督権といってもよいし、当時の言葉でいえば惣領権といってもよい。

筆者の理解するところでは、それは「皇位の最終的な決定権者」（位階・官職の任免権と天皇家の莊園など家産の処分権も含む）を意味すると考える。ただ、前述のように黒田は天皇位が後宇多の時は天皇家の惣領権は龜山にあり、伏見が踐祚して惣領権が後深草に移ったとしている⁹⁾。これは後宇多在位までという意味で正しい認識である。つまりその時期まで天皇家を一つの家と考えているわけである。しかし、伏見以降は龜山の皇統（大覚寺統）と後深草の皇統（持明院統）とに天皇家が分裂し固定化するので、惣領権はそれぞれの皇統に独立して成立すると考えるのが妥当であろう。なぜなら、一方は他方の皇位継承者決定には関与できないからである。

さて、院政の場合それが天皇の直系尊属による家父長権に基づく統治権の行使であるから、後述の「恒明の扶持」（立太子）問題の時期は天皇が後二条で後宇多の院政期に他ならない。その時、治天の君である後宇多に自らの直系卑属への皇位継承を一時的にせよ断念させた龜山を大覚寺統の惣領といわずして何と呼ぶのだろうか。この意味から後宇多の惣領権は少なくとも父である龜山とその存命中は分有されたものであり、大覚寺統という家内部においては最上位の家長権（皇位継承の決定権）は相対的に上位である龜山にあったと考えるのが合理的ではないだろうか。言い換えれば、この時、治天の君と惣領は大覚寺統においては分裂していた（あるいは部分的に分裂していた）。龜山の死によって、分裂していた治天の君と大覚寺統の惣領が後宇多によって統一されたことになる。この後、後醍醐の親政開始まで後宇多が大覚寺統での治天の君であり惣領であった。ただ恒明の立太子問題は後述のようにそれに重大な関係を有していた。

後宇多と忠子と子供たち

先述のように、後宇多は忠子との間に四人の子供をもうけている。奨子内親王（達智門院）、尊治、性円、

承覚である。奨子は尊治より二歳年長で後に伊勢の斎宮となったが、後二条天皇の死去によってとりやめとなった。末子と思われる承覚は梶井門跡で天台座主をつとめた。性円は一二九二（正応五）年に生まれたと思われる、大覚寺座主となった。こうしたことから考えて、忠子との関係にかかわらず、後宇多は子供たちをきちゃんと処遇している。特に後宇多は奨子を「すぐれ給へる内親王を、いとかなしき物にかしづききこえさせ給ふ。」¹⁰と記されているように大変可愛がつて育てた。次男と思われる性円は大覚寺座主となったが、大覚寺こそ後宇多の出家後の御座所であり多くの莊園を寄進しており、性円をその座主としたことは将来の生活の安定と真言密教の自らの法流を嗣がせたことになる。大覚寺統というのも同寺に由来していることはいうまでもない。

忠子と子供たちの生活に大きな変化がおとずれるのは一二九四（永仁二）年のことである。同年は尊治の末弟承覚が生まれた年であるが、忠子は子供たちとともに亀山のもとに移ったと考えられる。この年の六月ころから後宇多は後深草皇女の玲子（遊義門院）と同居をはじめた。玲子は後宇多最愛の女性であったらしく、嫡子後二条天皇践祚の際には准母となっている。そして玲子の死に際して後宇多は出家をとげている。こうしたことから、どうやら後宇多と玲子との同居が忠子との別居の直接原因ではないかと推測される。皇女で正妃の玲子としては、四人も子供を産んだ忠子が後宇多の側にいることは気にそまず気詰まりではなかっただろうか。つまり、忠子が自ら望んで亀山のもとに行ったのではなく、後宇多が玲子との同居の条件として、忠子子供四人とともに亀山に預けたというのが真相ではなかったかと想像される。そう考える理由は、その時期に後宇多と亀山が特に不仲だったことを示す直接的史料がみられないからである。さすがに愛妾が父親の元に自らの意志ではしつたとすれば、何らかの反応があつてしかるべきではないだろうか。したがって亀山、後宇多父子の間に亀裂が走るのは恒明誕生以降のことであると考えられる。さらに、前述のごとく後宇多は忠子の生んだ

天皇名	系統	立親王	元服	立太子	踐祚
後嵯峨			23		23
後深草	持明院	1	11	1	4
龜山	大覚寺	1	11	10	11
後宇多	大覚寺	2	11	2	8
伏見	持明院	11	13	11	23
後伏見	持明院	1	13	2	11
後二条	大覚寺	2	14	14	17
花園	持明院	5	15	5	12
後醍醐	大覚寺	15	16	21	31
光厳	持明院	1	17	14	19

(出典：森茂暁『後醍醐天皇』46頁)

図Ⅱ 持明院統・大覚寺統歴代天皇の立親王・元服・立太子・踐祚の年齢(数え年)

子供たちを疎んじていた様子はいかがえない。では肝心の尊治はどうであったかというと、出家させない皇子としてはその処遇はあまり厚いものとはいえなかった。なにしろ親王宣下が一五歳になってからのことである。異母兄の邦治(後二条天皇)は二歳で親王宣下をうけている。後嵯峨から光厳までの一〇人の天皇の立親王、元服、立太子、踐祚の年齢を比較すると後醍醐の特異性がさらに一層明らかになる^①。

つまり、出家させずに王家内に残す皇子としてのその処遇を後宇多が決めきれない状態が長く続いたこととを示しているのではないだろうか。原因は嫡子邦治の病弱ではないかと想像される。そこで尊治をめぐる人びとの動向を時系列で整理すると次のようになる。

一二八五(弘安八)年三月に後宇多に第一皇子邦治(後二条天皇)が誕生した、生母は堀河具守娘基子(西華門院)である。邦治は翌年一〇月二歳で親王宣下を受けた。一二八八(正応元)年一月に尊治(後醍醐天皇)が誕生している。ところが、尊治が親王宣下を受けるのは一五歳になってからであり、邦治とは処遇が大きく異なっていた。西華門院の父堀河具守は従一位内大臣の上級貴族であり、忠子の実家五辻家とは家格が異なっていたためであろうか。筆者の仮説は、この長く続いた尊治の処遇のモラトリウム状態を忠子は預けられて同居していた物領の龜山の力にすがって打開しようとしたのではないかと想像しているのである。その背

景には、忠子の姪―忠子の兄弟経氏の娘―は伏見天皇との間に皇子をもうけ、それが後伏見天皇となっている。姪の子胤仁は一二八九（正応二）年二歳で立太子している。それに引き替え自分の子は、と考えたことも動機の一つかもしれない。時期の問題はともかく、亀山と忠子の関係のきっかけはこうしたことではなかったかと考えると、亀山、後宇多、忠子そして尊治の相互関係から結果論的にはあるが平仄が合うように思われる。

一二九八（永仁六）年六月に邦治（後二条）は一四歳で元服した。実はその翌月、忠子が亀山院の沙汰で従三位に叙せられている。『増鏡』にあるように、こうしたことが亀山との不倫関係を想像させる根拠になっている。また同年七月には伏見天皇から後伏見天皇への譲位がおこなわれ、伏見の院政となった。この時あわせて八月に邦治が皇太子に立てられている。迭立状態がいよいよ固定化していった。こうした時期に忠子が亀山院沙汰で従三位に叙せられたのは、亀山サイドから見れば、亀山にはまだ恒明が誕生しておらず、同居している孫の尊治を可愛がっていた時期であり、尊治の将来への布石として忠子を従三位としたのでないかと想像される。つまり、この時期までには亀山と忠子の間に関係が生じていたと考えてもおかしくはない。

一三〇〇（正安二）年一二月には邦治に第一皇子邦良が誕生した。後宇多にとつては嫡孫である。この時期、朝廷では最高実力者であった西園寺実兼が伏見上皇側近の京極為兼との不和から持明院統をはなれ大覚寺統に接近した。その機をとらえて後宇多は並々ならぬ政治家ぶりを発揮し後伏見の治世を早期に終わらせ、翌一三〇一（正安三）年一月邦治の践祚（後二条）に成功する。その結果、後宇多は治天の君として院政を開始した。こうして後宇多は邦治（後二条）―邦良という大覚寺統の正嫡を確立したかに思われた。

この頃から後宇多は、長い間モラトリアム状態にしていた尊治の存在意義を認識するようになっていったかと思われる。それは、後の後宇多の後醍醐への遺詔に表れていたように、嫡流（後二条流）を支えるものとしての尊治の存在である。しかし後宇多には後二条と邦良父子の病弱という懸念があり、「もしもの場合」のス

ペアすなわちワンポイントリリーフとしても尊治を位置づけはじめたのではないかというのが最も合理的な解釈であろう。それが翌一三〇二（正安三）年六月の尊治一五歳での立親王という結果になったのではないかと。実はその一年前の一三〇一年七月に忠子がこれまた亀山院沙汰で准三后となつてゐる。生母が准三后となることは結果的に尊治の政治的位置を上昇させることを意味し、たとえそれが亀山院沙汰としてもそのこと自体はこの時期の後宇多としては許容できることであつたともかんがえられる。ここまで後宇多は将来も見据えた万全の処置をとつてきたと思われた。しかし、思わぬ事態が起つた。

恒明の誕生と後宇多の対応

一三〇三（乾元二）年五月に亀山に恒明が誕生し、それまで尊治に向けられていた践祚の願文まで捧げた祖父の愛情は自身の末子恒明に移つた。亀山はこの末子を溺愛した。そしてこの「亀山院鍾愛の御末子」の将来を保障するために、次のように立太子させるとの約束を後宇多に認めさせ、持明院統の伏見上皇からも承諾を取り付けたのである。⁽¹²⁾

立坊の間の事、院ならびに持明院殿御返事かくのごとし。野鶴の思ひを絶たず奔波、至孝の志をもつて、謝さるべきものなり。かつがつこの旨をもつて関東に仰せらるべきものなり。毎事前右府候へば、仰せ合はさるべきなり。成人に及ばずといへども、かくのごとく書きおく。遠方に達せらるべきなり。

嘉元三年八月五日

「野鶴の思ひを絶たず奔波、至孝の志をもつて、謝さるべきものなり。」というところに幼い恒明の将来を思

う老父亀山の心情が吐露されているが、他方、これは後宇多にとってみれば、立太子以来三五年以上揺らぐことのなかった自己の正嫡の立場が覆いかねない事態で、極めて不本意な出来事であったに違いない。しかし、父親であり大覚寺統の惣領・家長である亀山の意には従う他はなかった。筆者が亀山が出家後もお大覚寺統の惣領の地位あったと見なす根拠である。

ところが、亀山は恒明の成長も念願の立太子も見とどけることなく二年後の一三〇五（嘉元三）年九月に死去する。これよって、後宇多が自己を縛っていた父の束縛から自由になったと感じたことは間違いない。後宇多は亀山死後半年もたたぬ中に西園寺公衡を勅勘処分にして所領を没収するという挙に出た。公衡（前右府）は恒明の母の兄で亀山が恒明の後見役としていた。前記の如く「毎事前右府候へば、仰せ合はさるべきなり」と記している。しかも現職の関東申継であった。森はこの一件を「亀山院との約束を履行しようとしないうち後宇多との間のトラブルによる¹³⁾」と推測している。後宇多にしてみれば、恒明立太子の約束は父亀山によって洪々同意させられたわけであるから、亀山の死後、この遺詔は当然ながら反故にされてしかるべきものと考えたのであろう。しかし、恒明側はその後も立太子をあきらめず、持明院統に接近してでも目的を果たそうとするなど大覚寺統内の反主流派とでもいえるべき存在になってゆく。結局、後宇多は亀山の死後、恒明を皇位継承から排除し、大覚寺統を強いリーダーシップで引つ張ってゆくことになる。しかし、後にその後宇多も後醍醐に対して亀山と似た惣領権を行使した遺詔を残し歴史に大きな影響を与えることになる。歴史はくり返したのである。

『女院小伝』によると前述のごとく忠子の従三位と准三后はいずれも亀山の沙汰によるが、なにより「嘉元元年九月日尼となる。」とある記事が注意を引く。¹⁴⁾ 忠子は三六歳で出家しているが、それは亀山の出家とほぼ同時期であった。それが、自身の従三位、准三后への報恩の意味であったにしても、夫ではなく舅の出家に殉

じての出家はやはり異例なのではないか。と考えるのは、『花園天皇宸記』の一三一九（元応元）年忠子が没した翌日（十一月一六日）の条に、自分の女御であり現天皇（後醍醐）の生母であつたにもかかわらず、「後に聞く。法皇御喪籠の儀にあらず。ただ近辺に御所を為すなりと云々。」と、後宇多が服喪していなかったことをいささか驚きの様子で記している。さらに『宸記』には「進退頗る不審なり」とある。¹⁵つまり、時期や理由は定かではないが前述のような事情で、忠子と亀山の間に特別の關係が生じ、それを後宇多が知っていたと想像される。自分の女御であり現天皇の生母である忠子の死に際して後宇多が服喪しなかったということは、両者の夫婦關係がその時点では断絶に近いものであったと想像される。つまり、『増鏡』の忠子と亀山に関する記述は根も葉もないことではなかったと考えられるのである。

後二条の早世と尊治の立太子と御宇多の遺詔の影響

さて、後宇多は後二条天皇の実父として院政を敷いた。しかし、肝心の後二条が一三〇八（徳治三）年八月病死してしまい、持明院統から立てられていた皇太子の富仁（花園天皇、後伏見の弟）が踐祚することになり、大きく事態が動き出した。富仁が踐祚すればそれに伴い、伏見上皇の院政へと治世は移動することになる。とすれば、政局の焦点は花園天皇の皇太子に誰を立てるかに移る。この時、持明院統の正嫡後伏見にはまだ皇子は産まれておらず、富仁の皇太子に立てる皇子は他にいなかったから、状況は大覚寺統に有利であった。しかし、後宇多にとって都合なことは、後二条の嫡子邦良には懸念材料があったことである。年齢からいえば邦良はこの時九歳であつたろうから立太子の条件を欠いていたわけではない。むしろ病弱の方が問題であつたと思われる。¹⁶ここにおいて後宇多は、尊治を立親王させておいた意味を改めてかみしめたであらう。

しかし、花園の皇太子に誰を立てるかという点で、大覚寺統では候補者を一本化できなかった。というの

は、恒明はこの時六歳で、立太子する年齢として不足はなかった。恒明というよりは母の昭訓門院が中心となり、恒明の立太子と富仁の践祚がセットになった申し入れが鎌倉に対しておこなわれたのである。しかもそれは大覚寺統の惣領としての後宇多の頭越しにおこなわれた。つまり、反古にしたはずの亀山の遺詔が改めて持ち出されたわけである。その裏には、恒明の立太子を支持する勢力が存在していた。大覚寺統内の亀裂が表面化したわけである。ここで後宇多が邦良の立太子を強く主張すれば、立太子に年齢的にも不足のない恒明にも同様の主張が可能となる。しかもどちらも大覚寺統の正嫡を主張できる条件を備えていた。

さらに後宇多にとっては思いがけないことに、持明院統が恒明の立太子を支持したのである。というのも前述のように、持明院統には花園の皇太子に立てるべき皇子がいなかったからである。したがって、恒明立太子は富仁践祚実現の早道と考えたのである。この点については、森茂暁『皇統の対立と幕府の対応——恒明親王立坊事書案 徳治二年をめぐって——』⁽¹⁷⁾に詳しいので、要点を紹介しながら議論を進めたい。この文書は後二条天皇の一三〇七（徳治二）年に、持明院統から幕府へ皇太子（富仁）の践祚を促すための事書案なのだが、ポイントは文中に「亀山院御素志」（すなわち恒明の立太子）が皇位の正統な継承を決定する最も重要な論拠として指摘されていることである。かつて大覚寺統は後嵯峨の遺詔を根拠に治世や皇位継承の正統性を主張した。今回は、同じ論理が持明院統の惣領である伏見も同意した明確な亀山の遺詔として持ち出されたわけである。森は「事書案の主張の眼目が、亀山院の明白な素意によって皇嗣に指名された恒明こそ正統な皇位継承者であって、素意に違背した後宇多院は『不孝之至』である。即刻恒明を立坊させよ（同時に富仁親王の践祚が実現する）という点にある」⁽¹⁸⁾と指摘している。さらに森は「恒明が正嫡であることは亀山院の素意であるにもかかわらず、もし正嫡を備えられがなければ、亀山流は断絶するということを述べている。」⁽¹⁹⁾と指摘している。換言すれば、これは持明院統は後宇多皇統の正嫡性を認めないという宣言に等しい。ここにはたびたび後宇多

の政治力に苦汁を飲まされてきた持明院統の屈折した感情が表出している。ここから分かることは、富仁踐祚の時に誰をその皇太子とするかは後二条病没の前から、大覚寺統内および持明院統との間で暗闘が行われていたということである。

しかし、結果は皇太子は尊治に決定した。そこには後宇多の用意周到な政治工作が介在していた。後宇多は亀山の死後、鎌倉に使者をたてて尊治立太子の工作をすでに始めていたのである。この時、後宇多の意を受けて鎌倉に下向して交渉したのが他ならぬ吉田定房であった。目的は恒明立太子の動きが具体化する前にそれを阻止することであった。定房としては自分が乳父をつとめている尊治の立太子が実現するかどうかの重要な交渉であったから奮闘したに違いない。一三〇八（延慶元）年九月四日には鎌倉からの東使が関東申次西園寺公衡の邸に到着し、伏見上皇の治世（ということは富仁の踐祚）と尊治の立太子を認める旨の決定を伝えた。

以上のような事情と経緯で、皇位継承の可能性がほとんどなかった尊治にチャンスがめぐってきたのであるが、この時すでに二〇歳を超えていた尊治にとって全てに満足のいく結果とはいいたくたい状況であった。それは、大覚寺統の惣領である後宇多が皇統の嫡流を後二条の長男で自身の嫡孫邦良であると考えていたからである。尊治はあくまで邦良が成長するまでの中継ぎにすぎないことが後宇多の意志として明確にされていたからである。言い換えれば、それが大覚寺統内における尊治立太子の条件であった。

後宇多は後二条の死後間もない一三〇八（徳治三）年閏八月三日付けの譲状において、讃岐、越前、因幡の三方国の他、八条院領、安楽壽院、歆喜光院などの王家領をはじめ萬里小路殿の文庫の和漢文書等を尊治に譲与している。これは邦良に直接譲るものを除いて大覚寺統の惣領として後宇多が受け継いだ全てのものであった。（恒明にはすでに亀山から多くの所領が贈与されていた。）「右、寺院御所和漢文書等、不残一紙、所譲與中務卿尊治親王也」と書かれている。しかし、その後に続く部分が尊治にとっては大きな問題であった。

「後二条院為長嫡可相承之處、不慮崩御、御悲歎而無盡」と嫡子後二条天皇が全てを相続するはずであったが早世したことを「悲歎盡きること無し」と歎き、そうなった以上、すべてを尊治に譲るが「一期之後、悉可譲与邦良親王」とあるように、尊治が死んだ後はすべてを邦良に譲るべしと明記されていた。さらに尊治の子孫で賢明の器の者は親王として「朝」に仕え「君」（天皇＝邦良）を輔けよと命じ、最後に「以後後二条院宮可如實子、努く令保護、殊存孝行、可成朕矣」と、以後邦良を実の子のように保護せよ、それが殊の他自分に対する孝行である、とダメ押ししている。この譲状は、尊治が中継ぎの「一代の主」に過ぎず、大覚寺統の正嫡が邦良であることを惣領の後宇多が明言したものであった⁽²⁰⁾。

いかに立太子し、将来践祚・即位して天皇となっても治天の君として後宇多が院政を敷いている間は実権はないし、しかも次に邦良が践祚すれば尊治が院政を敷くことはできない。さらに、大覚寺統の惣領権が後宇多から直接邦良に受け継がれば、文字通り尊治は中継ぎの「一代の主」ということで終わってしまう。ここに尊治の大きなディレンマが存在した。後宇多が龜山に対してそうであったように、尊治も後宇多の目の黒いうちはその惣領権の行使には従う他なかった。尊治の皇太子時代とはまさにそうした時期であった。こうしたことが、後宇多は尊治をやむを得ず大覚寺統のワンポイントリリーフとせざるを得なかったが、やはり両者の関係は良くはなかったという説の根拠となった。

立太子した尊治は一三一七（正和二）年秋に西園寺実兼の娘禧子を密かに盗み取っている。父後宇多と玲子の関係に類似しているわけであるが、尊治の場合は自己の不安定な政治的立場を関東申次の西園寺家と姻戚関係を結ぶことによって強化しようとしたことと思われる。そして一三一八（文保二）年二月二十六日、立太子して一〇年にして花園天皇が退位し尊治が践祚した。後醍醐天皇の登場である。これはいわゆる文保の和談が成立していたか否かは別として、後宇多の政治交渉の結果であった。即位式は同年の三月二九日であった。そ

の結果、後宇多の第二次院政が始まったが、この時後醍醐はすでに三一歳になっていた。そして、その皇太子には後宇多の意向通り邦良が立てられた。これまた後宇多の政治力のなせる業であった。しかし、すでに壮年に達しており意思も強固な後醍醐は、決して父後宇多の従順な傀儡にはなり得なかった。

歴史はくり返すというが、以前龜山がそうであったように、後宇多も期待の嫡孫皇太子邦良の踐祚を見届けることなく没した。そして、その邦良も一三二六（正中三）年には早世し、後醍醐を拘束していた諸条件は取り除かれたかに見えた。そして、新たな皇太子が立てられることになったが、候補者は持明院統から後伏見の皇子量仁（光厳天皇）、大覚寺統から恒明と邦省（邦良同母弟）であったが、現天皇後醍醐の第一皇子尊良もその一人であった。この時点で大覚寺統は三分裂していたことが分かる。恒明は前述のように龜山の遺詔を根拠に立太子を望んだ。邦省は後宇多が邦良の病弱を考慮して後二条流の第二の嫡流として後醍醐の内裏で元服させており、後見として左大臣洞院実泰が付けられていたから、後醍醐にとっては無視しがたい存在であった。結果は、幕府によって迭立の原則から持明院統の量仁が立てられた。しかし、邦省は後二条流こそ大覚寺統の嫡流という意識を持ち続け、その後も執拗に立太子の働きかけを続ける。それは量仁の踐祚とセットになっていたから後醍醐にとっては自らの退位が前提の話で、容認できるものではなかった。このように、両統迭立という大枠が存在し、しかも大覚寺統内が三分裂した状態で、現職のしかも親政している天皇ではあるが自身の惣領権も脆弱な後醍醐は、自己を規制するそれらの諸状況を止揚するためにも倒幕へと進んで行かざるを得なかったのである。

後宇多第二次院政停止と後醍醐親政の開始

後醍醐天皇親政開始の事情であるが、まず後醍醐踐祚によって二回目の後宇多院政が始まった。後宇多は龍

姫玲子（遊義門院）が一三〇七（徳治二）年に死去した際に出家して法皇となり院政をおこなう一方、仏道修行、特に真言密教の信仰に没入した。しかし、この第二次院政は「晩節政事齊はず、政賄をもつて成る。惜しいかな、始めあつて終わりなし」²¹と厳しい評価がなされている。第一次院政期は「乾元・嘉元の間政理乱れず」と持明院統の花園天皇からさえ讃えられたが、第二次院政期は賄賂政治が横行したと批判されている。後宇多の院政は一三二一年（元亨元）年一二月で停止され、以降後醍醐の親政となった。後宇多の死は一三二四（元亨四）年七月のことであるが、「晩節政事齊はず、政賄をもつて成る。」とは具体的にどんなことだったのか、そして何故院政が停止されたのかははっきりしていない。『増鏡』には後醍醐の乳父であつた吉田定房が「御門に天の下²²の事、譲り申さむ」ことを幕府と交渉するため鎌倉に派遣され、幕府は「御心のまゝなるべく」奏したと記しているが、定房は後宇多の使者として鎌倉に下っている。後宇多はもともと仏道修行に熱心であつたが、寵妃の死後それに専念したい思いが募つたのかも知れない。あるいはまた、和談が成立したとすれば、花園がそうであつたように在位は一〇年が目途とされていたのでいづれ邦良に譲位しなければならぬ。そして邦良が践祚したなら後醍醐は院政を行えず、「一代の主」で終わってしまうので、せめてそれまでの数年は親政させようという「親心」だったのかも知れない。さらに後醍醐の方から後宇多にこうした事情をふまえて持ちかけた結果だったかも知れない。『増鏡』の記述や後宇多、後醍醐の関係から考えて、これが一番平仄の合う解釈かも知れない。つまり後宇多の同意のもと、後醍醐の親政が実現したことは間違いない。

第四章 後醍醐政権の思想と行動

後醍醐親政の理念

こうして、念願の親政を開始した時、すでに壮年に達していた後醍醐が意欲的に政道の興行に取り組んだことは事実である。後醍醐政権の特徴として指摘されているのが、まず第一に記録所の設置とその活発な活動であり、次いで検非違使庁の積極的な活用による洛中支配などがよく知られている。それらは京都の人と土地の支配、そして経済、財政政策にも積極的に取り組もうとしていたことを意味する。それは権門寺社が従来もっていた特権にも制限・統制を加える専制的な性格であった。そして、それらが建武新政にもつながる性格を持っていたことが重要である。ここで問題にしたいのは、そうした後醍醐親政の思想的基盤あるは背景は何か、ということである。

従来、後醍醐と近臣たちの間に当時新興の宋学の影響が強くみられることが指摘されてきた。⁽¹⁾ この点をさらに掘り下げた業績も増えてきた。近年、それを最も積極的に評価したのが兵藤裕巳『後醍醐天皇』であろう。兵藤は第二章において後醍醐周辺のみならず広く当時の朝廷における宋学受容を強調している。その根拠として『花園天皇宸記』を引用して「主上（後醍醐：引用者、殊に中庸の道を学ばしめ給ふ。政道は淳素に帰すべしと云々。尤も然るべき事なり。近代、儒道已に廃れ来たること久し。此の時に遇ひ、中興有るべきか。」と後醍醐が『中庸』を学んでいたことを記しているが、いうまでもなく『中庸』は朱熹が「四書」の一つとし儒教の根本經典とした「四書」の中で最後に学ぶべきとされた経書であった。持明院統の上皇御所でも『論語』の談義がおこなわれている。宋学はまさに当時流行の新思潮であったようだ。ただ、兵藤が宋学の流行を指摘したのは、「後醍醐天皇がイメージした『新政』（天皇親政）の理想も、その背景には、宋学とともに受容

された中国宋代の中央集権（＝皇帝専制）的な国家イメージ（傍点＝引用者）が存在したのである。⁽³⁾ ということにポイントがある。つまり、倒幕イデオロギーとしての宋学の名分論の受容という視角からではなく、「新政」の「イメージ」を宋の中央集権的な皇帝専制に投影できる（つまり類似している）という視角からの評価ということになる。つまり、直接的なイデオロギー的よりどころとしてではなく、その社会的な背景として宋学の流行を指摘しているわけである。では、その「国家イメージ」とは何なのか、あるいは両者を比較しての具体的な論証は残念ながら明確には述べられてはいない。しかし、この指摘は後醍醐親政の性格を分析する上で検討すべき重要な論点ではあると考える。

後醍醐政権における宋学の影響に関しては、兵藤のように総じてこれを積極的に評価する立場と、和島芳男のように否定的に評価する見解に大きくわかれているが、近年は程度の差はあれ、評価するものが多いようである。ただ、新田一郎『太平記の時代』（講談社、二〇〇九年）はこの点に関して次のように抑制的である。⁽⁴⁾

もともと、宋学の思想的 content と後醍醐の政治思想の間に直接の関係を見出すことは、必ずしも容易ではない。後醍醐やその周辺において、宋学がそれ以前の儒学とどのように違うものと認識されていたのか、宋学のどのような特質が後醍醐の政策とどう関係していたのか、などの問題については、まだ十分に議論されていない。…（中略）…宋学が後醍醐においてどのように内面化され、その政治思想の形成にどのように関与したのか、きちんとした評価がなされてきたとは言い難い。

新田の見解は現状においては客観的に極めて妥当な評価と思われる。そこで、次に両統迭立期を中心として朝廷周辺における宋学受容の問題を考察してみたい。

建武前後の宋学受容について

この時期の朝廷周辺における宋学受容において必ず論拠とされてきたのが一条兼良の『尺素往来』の次の一節である。⁽⁶⁾

近代獨清軒玄惠法印、以宋朝濂洛之義為正、開講席於朝廷以來、程朱二公之新釋可為肝心候也。…特北畠入道准后被得蘊奧云々。

この点について和島は「大日本史が右の『朝廷』を専ら後醍醐天皇の朝廷と解して以来、玄惠を以て宋学の主唱者とし、皇家中興の思想的原因を南朝忠臣の宋学研究に見出だそうとするのが近世学会の流風であった。」⁽⁷⁾としている。そして、後醍醐、南朝のイデオロギー的主柱であった親房は宋学の「蘊奥」を得ていたと『尺素往来』は述べている。和島の中心的な論点は、後醍醐・南朝による「皇家中興の思想的原因」を宋学に求めることの史料の根拠の曖昧、薄弱なことを論証しようとするところにある。この点において筆者は何か具体的に論争に加わる能力はないのだが、次の三点はもっと具体的に検討、論証されてしかるべきと考える。

第一点目は、「北畠親房が宋学（宋代の新儒学、以下、宋学と呼称する）を受容していたというのは、室町時代の『尺素往来』以来の通説である。」⁽⁸⁾とする見解に關してである。一条兼良による同書の成立は称光天皇の時代（上限一四一二年、下限一四二八年）であろうというのが通説のようであり、そうだとすれば建武新政崩壊（一三三六年）から約八〇年後のことである。同時代の記述とはいいい難く、和島の指摘するように、兼良の記述が『花園天皇宸記』の宋学流行に關する記述の「二箇條を不容易に結合してその説を成し、大日本史はこれと太平記の記事とを關聯せしめて『朝廷』を後醍醐の朝廷と即斷したのではないか。」⁽⁹⁾との疑問は未だ解

消しているとはいいい難いのではないか、という点である。

第二点目は当時の宋学の「達道」（主導者）とされた玄恵の履歴に関してである。玄恵は建武式目の策定者の一人でもあり終生直義の恩顧を厚く受けたといわれていることと、玄恵が禅僧ではなく天台僧であったが、宗論に敗れて禅宗に帰依したとされているが、天台側の資料にはこうした経緯がみられないこと、つまり、玄恵の経歴が今ひとつはつきりしないことである。さらに玄恵と持明院統との交流は『花園天皇宸記』や『園太暦』などに出てくるが後醍醐周辺との交流ははつきり指摘できないことなどである。

第三点目は、問題の日野資朝に関する「宋学を張りおこなふもの」との『宸記』での記述は資朝がまだ花園に仕えていた時期のことであることと、資朝が「新註」に拠って議論を展開したとは確認しがたいことなどである。しかも資朝は倒幕前に殺されている。つまり、後醍醐周辺と宋学受容の関係を強く示す史料が充分とはいえないのではないかというのが率直な感想である。前章で採り上げた吉田定房は『孟子』への言及や易姓革命への危機感などから「例外的」に影響がはつきり指摘できる数少ない例である。

宋学の影響を重視する兵藤の議論は内容から判断するに、天皇親政Ⅱ論旨による「新しい勅裁体制」を宋の皇帝専制の国家体制との類似関係を「イメージ的」あるいは「比喩的」に表現したものと考えられる。この点に関しては新田も「一方で、宋朝中国の政治体制と後醍醐の政権構想との間に対応関係を見出す説は、それなりに説得的である。」¹⁰と評価している。たしかに、後醍醐の建武新政では摂関も太政大臣も置かれず、伝統的な上級公卿による合議制（公卿詮議）も解体された。兵藤はそれを「後醍醐天皇がめざした『新たな勅裁』の政治は、君と民のあいだに介在する臣下のヒエラルキー（門閥、家格）を解体すること、その一点に向けられていたといっても過言ではない。」¹¹と結論づけている。つまり、後醍醐は既存の社会秩序、政治秩序に対しては破壊的といってもいいような「革新指向」がはつきりしていた。それが政治体制としてそれまでの常態で

あつた院政の否定、摂関制の否定、幕府の否定へと結実し、万機天皇親裁を目指す建武政権へと進んでいった。そのこと、思想的、理論的根拠として、宋学の受容が主張されてきたわけである。しかし、先にも指摘したように、後醍醐およびその周辺における新註の受容とその社会的拡大という点については現状では証拠に乏しいように思われる。この点については新田の以下の主張が妥当ではないかと考えられる。¹²⁾

おそらく、後醍醐にとっての『宋学』の評価は、思想としての一貫した体系性にはなく、宋朝の政治体制を記述する実践的な知識にあつたであろう。

筆者はそれを自己（後醍醐）の正統性を前提にアプリオリな支配の正当性に基づく天皇独裁体制を正当化する理論であつたと考えているが、それも史料的に実証するのは簡単ではない。また、それは、南朝が政治的、軍事的に劣勢で現実的には地方政権に転落していたからこそ、同じく北方異民族に圧迫されていたが故に、逆に朱子の『通鑑綱目』に表れたような正統性（論理必然的に支配の正当性にも）に固執した南宋の思想状況とも平行であつたということにならう。以上のことから、したがって、この問題での結論は保留したいと考へている。

後醍醐専制化の内的要因

ここまで見てきたように、その思想的背景が何であれ、後醍醐政権が万機親裁の天皇独裁を指向していたことは大方異論のないところである。その「異形」性については様々な角度から検討されてきている。この点について、鎌倉後期における公家社会の動向と「治天の君」の果たした役割の分析から、後醍醐の天皇独裁路線

が突然変異的に出現した、あるいは後醍醐の特異な個性に還元する議論に疑問を呈し、鎌倉後期から建武親政期を経て室町前期に至る内的必然性をもった連続的な過程のなかに位置づけようとする研究が注目される。

筆者が示唆に富んでいると考える市沢哲「鎌倉後期公家社会の構造と『治天の君』」¹³は、「治天の君」が公家社会ではたす役割が大きくなった原因を「氏・家内での家産の争奪」に起因した「貴族の分裂」（庶流の輩出）に求めている。市沢は『尊卑分脈』の分析から「院政期から鎌倉後期の段階ではほとんどの家筋が確立し、室町以降では分家の傾向はほとんどみられない」ことと「鎌倉後期は院政期以来の貴族の分家の最後のピークであり、かつ分家が抑止されはじめた時期、と位置づけられる。」としている。その理由は「分割相続が進み、これ以上の家産分割ができない状態に至ったのではないか」と指摘している¹⁴。

そして、庶流の輩出と相互の家産の争奪は「その解決はほとんどが評定への提訴や院宣、綸旨発給によってなされており、『治天の君』の果たす役割が大きかった」と指摘している¹⁵ことが重要である。当時の貴族社会は、官職と特定の家が結びつく「職の体系」として組織される面を強く持っていたわけであるが、鎌倉後期がその解体が始まる時期であり、他方でそれを維持するためには「職の体系を越えた『治天の君』権力が発動される」必要（安堵・裁許の必要性）¹⁶があつたと主張している。さらに、市沢は所領をめぐる訴訟や家礼相論の分析から「大胆に言えば、この時期、貴族社会の混乱のなかで、『治天の君』が専制的な性格を帯びる可能性が胚胎されていた。」と重要な指摘をしている¹⁷。

そして、本稿との関連では「新しい政権構想が日程にのぼったとき、『治天の君』は政治的統一の核として登場する可能性を十分に持っていた、といえよう。このような意味で、後醍醐天皇出現の前提として、鎌倉後期の『治天の君』の政治的地位を位置づけておく必要があるのではないだろうか。」¹⁸と述べている。建武新政以前では、後宇多の院政停止以降は親政であり、後宇多死後、大覚寺統の惣領は後醍醐であるし、建武政権下

では持明院統の光厳天皇を廃位して実質的に王家を統一しその惣領となったのであるから、前述のような貴族社会の在り方が後醍醐独裁の内的条件を準備したという市沢の説は説得力があると考ええる。

ただ市沢も指摘しているようにその前段階の皇統分裂Ⅱ兩統迭立の条件下では、治天の君の決定も統の交替によって裁許が変更され相対化される。⁽²⁰⁾こうした事態も後醍醐の専制化の前提条件として考えなければならぬであろう。つまりそのような状態の止揚こそ後醍醐が目指したものであったからである。

後醍醐政権における人材登用の特徴

後醍醐政権を考える時、それを支える人材登用には従来とは異なる特徴が強く見られる。例えば兵藤も主張するように、四位相当の太政官八省の長官（卿）に家格でいえば、摂家、清華家、大臣家という高位の者を充てているし、国司にいたっては五位、六位相当の官職である。ここに後醍醐は三位以上の公卿を貼りつけている。ただ、そうした公家の中には北畠家、洞院家、堀河家のように高位高官に昇る家ではあるがその後絶家しているものもあり、官位と家格の関係ではなお一部に検討の余地があるように思われる。

洞院家は西園寺家庶流で太政大臣まで昇進している者もあり、また天皇に正妃を入れており、存続していれば清華家ということになる。堀河家は村上源氏久我家庶流でやはり太政大臣まで昇進した者がおり存続していれば清華家ということになる。微妙なのは北畠家である。兵藤は北畠家を清華家としているが、北畠家は村上源氏久我家流中院家の庶流である。中院家の家格は大臣家であるが、北畠家は親房以前に正二位権大納言以上昇進した者はいない。北畠家もまた、親房の曾祖父以来、雅家（後嵯峨）、師親（龜山）、師重（後宇多）と仕え上皇の出家に殉じて出家している大覚寺統に特化して奉仕する家である。たしかに親房は権大納言から大納言に昇進し、その後従一位准大臣、さらに准后になっている。それは南朝後村上天皇の時期で、親房がま

さに南朝の大黒柱であった時期である。ここで注意したいのは、准大臣というのは三位以上の公卿に「大臣の下、大納言の上」の席次を与えるものであり、具体的な職務や権限のない待遇の付与であるという点である。さらに親房といえ、家格・位階と官職の相応性を強く主張した『職原抄』の著者である。その親房が待遇としての准大臣を受けたということは、少なくとも清華家あるいは大臣家相当の家格と自らを考えていなかったからと思われる。また、北畠家の家格が清華家であれば、その子女は摂家と並んで天皇の正妃となることができるが、親房の娘は後村上の女御となった。中宮に冊立されたという説もあるがはっきりしないし、女院号も伝わっていない。また、親房は源氏の長者として奨学院別当に任じられている。この点に関して『職原抄』によれば、源氏長者は「奨学院別当たるの人、すなはち長者と為る。」とされているが、この時代の源氏の長者は久我家、堀河家、土御門家、中院家から選ばれるのが通例で、親房の場合はこの四家に適任者がいなかったため後醍醐が任じた例外的措置であったと考えられる。また、親房以外に北畠家で源氏の長者になったものはいない。⁽²³⁾この四家は何れも大臣に任じられる清華、大臣家である。付け加えて、親房の嫡男顕家の官歴をみると参議、近衛中將を経て権中納言に昇進している。顕家もつと長命であったなら事情も異なってくるかもしれないが、親房も近衛少將、中將を経ていることから、官歴から推測して羽林家に相当している。これらのことから、北畠家の家格は羽林家と考えるのが妥当ではないだろうか。しかし、親房が後醍醐亡き後の南朝においてまさに大黒柱として重きをなしたことも事実である。

ともあれ、北畠親房は後醍醐の親政が始まって間もないころ検非違使庁別当に任命されている。⁽²⁴⁾後醍醐は検非違使庁を洛中支配の中心機関としようとしていたわけであり、家格、位階を無視した人事を意図的におこなったわけである。もちろん検非違使は令外の官ではあるが、従来は三位、四位相当の官である。親房はすでにこの時、正二位中納言で淳和院別当⁽²⁵⁾であったわけであるから、つまりそれは建武以前から後醍醐の基本方針

であった。もともと親房の任期は一年たらずで、その後任者は後醍醐の側近日野資朝であった。日野家の家格は名家であり、この時従三位参議になったばかりであったから、親房後任のこの人事が家格・位階よりも後醍醐の意のあるところを理解して行政を行うか否かが重要視された結果であろう。また現在ではよく知られていることだが、親房は建武政権では必ずしも重用されていたとはいえない存在であった。というのも、親房は官職と位階・家格が相応していることを重視する「真性保守」であって、この点ではそれを無視しがちな「革新指向」の後醍醐とはズレがあったという考え方も成り立つ。親房が『職原抄』を執筆した意図は、後醍醐がその秩序に従わなかったことが新政崩壊の一因であると考え、後継者である後村上天皇に官職と相応する位階・家格の関係を教え諭す意味があったと考えるわけである。

このように、後醍醐は家格や位階を無視した人事によって親政の実を挙げようと試みた。しかし、兵藤の宋朝の皇帝専制に類似した天皇専制体制の主張には前述のような問題点もあり、兵藤自身もそれをよく自覚して議論を展開しているように思われる。それは宋朝で皇帝専制体制を支えた科举制度とその合格者である士大夫（官僚制）階級を日本は欠いていたという厳然たる事実である。中国史においては貴族階級の没落と士大夫階級の興隆は支配階級の社会的形成・展開という点でひじょうに大きな歴史的転換であったとみなされている。兵藤の説明では日本に存在しない士大夫階級に代位したのが、日野資朝や日野俊基などの宋学を身に付けた有意な中下級の貴族や僧侶たちであり、かれらが事実上の士大夫として後醍醐の手足となって政権を支えて働いたという構図になるが、ここに検討すべき問題点があると思われる。資朝も俊基も建武以前の親政期までの側近たちであって、建武政権成立時にはすでに処刑されているし、彼ら以外の廷臣ではだれが士大夫に相当すると考えられるのが曖昧なのである。この時期、宋学を講じる会が朝廷でしきりともたれていたことは前述のとおり『花園天皇宸記』の記述などから間違いないことであるが、宋学に詳しいものとして玄恵などの僧侶は

別にして、兵藤は資朝、俊基、親房以外には挙げていない。ただ、要するに前述の如く、天皇親政の綸旨による「新しい勅裁体制」と宋の皇帝専制の国家体制との類似関係が宋学のイデオロギー的受容を前提にしている、と考えるところに一種の飛躍があるともかんがえられる。

後醍醐政権で活躍した貴族を概観すると、洞院実世、二条師基、近衛経忠などを除くと、確かに家格が名家、羽林家の者が多い。つまり後醍醐は中級公家、場合によっては日野俊基のようなより低い家格の者でも登用した。しかしそれは当たり前のことともいえる。上級貴族が中下級貴族より多いヒエラルキーは存在しないし意味をなさないからである。

また、両統迭立期の貴族がどちらか一方の皇統に仕える家として確立していったことは前提として確認しておきたい。例えば、吉田経長、定房父子は大覚寺統の治天の君・天皇の時に任官しているが、持明院統の天皇が立った時は辞官している。そしてまた大覚寺統の天皇が立った時には還任している。つまり吉田家は大覚寺統にのみ仕える家であることを鮮明にしていたわけである。北畠家も同様である。こうしたことは当時は普通にこなわれていたと考えられる。近代の官僚制論でいえば一種のスポイルズシステムのような機能を果たしていたと考えられる。こうした関係の継続は、君臣間に特別な親近感やアイデンティティを醸成していき、それが基礎となった強い主従関係を形成していったであろうことは想像に難くない。

ではこうしたことは後醍醐にのみ顕著な現象なのであるか。持明院統に特化して奉仕する家も当然存在する。先の日野資朝はもともと花園天皇に仕えていたのだが、後醍醐に出仕して父親の俊光から義絶されている。俊光、資名（資朝の兄）父子は一貫して持明院統に仕えている。資名は尊氏に光厳上皇の院宣をもたらすのに大きな役割を果たしている。つまり、日野家という持明院統に特化して奉仕する家から見ると、資朝が特異な存在ということになろう。また、京極為兼も伏見上皇の個人的な寵遇がなければあの「大活躍」は考えられない

い。千種忠顕の父六条有忠は、皇太子邦良親王の踐祚の工作のために鎌倉に使いしていたがその死によって出家している。つまり、六条家は後宇多、後二条、邦良という大覚寺統嫡流に奉仕した家とみることができ。この意味で忠顕は特異な存在といえよう。

この時期、天皇、上皇、皇太子、女院などと個人的な主従関係を結んで寵遇を得ることは一般的な現象であった。前述のように、それ故庶流が輩出したのである。つまり、両統迭立期は天皇一人に対して皇太子一人、上皇が複数存在し（多い時には五人）、女院の数も増え、儀式や日常的に奉仕する公家の人数が不足して公家の家から庶流が分立することを促進したという歴史的社會環境が存在した。その根本原因である皇統の分裂と細分化が自己の皇統とより緊密に結びついて事態を乗り切っていく近臣の存在をより必然化させたといえよう。前述のように、貴族の家における庶流の輩出は所領の相続や家職の継承で争いを必然化し、その裁定には治天の君（もしくは天皇）の安堵や裁許を必要とした。こうした要因が貴族層を特定の皇統や治天の君、天皇とより強く結びつけた。市沢の指摘するようにそれがこの時期、治天の君、天皇が専制化する内的条件を作り出したといえる。さらにそれが後醍醐の個性や政治志向と相まって建武政権の万機親裁の天皇独裁体制へと進んでいったと考えられる。その後醍醐は、もともと皇位継承が期待されていなかっただけに、皇太子時代から踐祚して以降に、自分とより強くアイデンティファイされた多くの近臣を作り出して政権を運営していく必要があった。彼らは後醍醐からの個人的寵遇により登用され昇進したわけであって、彼らが後醍醐の意を体し（あるいは忖度して）天皇独裁をより一層促進したと考えられる。

むすびにかえて

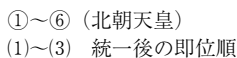
後醍醐が倒幕に踏み切った理由は、鎌倉末期の得宗専制体制の中で政治的、社会的、経済的に矛盾が激化し

たことが背景にあるが、皇位の決定に幕府の同意が決定的要因とされ、兩統迭立が前提になれば、自分の皇統に皇位継承できる可能性が低かったことがやはり大きな要因であろう。その決断に踏み切らせた思想的要因は、後醍醐にとつては「正統な王による支配はアプリアリに正当なもの」であり、論理必然的に臣下は無条件に服従すべきものとされ、自己以外に「天下静謐」の主体を認めることはできなかったことであると思われる。その思想的背景として宋学の名分論を想定することはあながち的外れとはいえないようにも思われるが、後醍醐の場合その「名分を正す」とは、具体的内容としては後嵯峨―龜山―後宇多―後醍醐という皇位継承こそが唯一正統なものであり、そうである以上、他の皇統は排除されなければならないし、臣下たるものはその統治に無条件で服従することは当然である（支配のアプリアリな正当性）という論理に貫かれる。本稿で見てきたように、親房の『神皇正統記』は、南北朝期において、大覚寺統・南朝の後醍醐から後村上へと皇位継承されたことの正統性と正当性を歴史的に弁証しようとしたものであったが、それは南朝が吉野に逼塞せざるを得ない政治的、軍事的状況下では現実的には一種の「政治神学」とならざるを得なかったわけである。

そして頽勢の南朝はついに神器を手放し吉野から京都へ帰還した。こうして南北朝時代は終わりを告げた。分裂していた朝廷は北朝に統一され、以降朝廷を武力で二分するような皇統の分裂はなかったわけであるから、後小松天皇以降の王家は安定して繁栄したかといえそうではない。後小松以前、後円融天皇の時代から顕著になった政治的実権をにぎる足利義満との関係が問題となった。それは後小松時代も基本的には変わらず、義満による天皇・上皇の聖俗両面での権限侵食が進み、義満は事実上、天皇・上皇の上に位置し、摂関もふくめて廷臣たち頗使しその上に文字通り君臨した。義満死後、四代將軍義持は、義満の対明外交政策を変更し明との冊封関係を絶ち、義満への太上天皇の尊号を辞退するなど、義満と異なる政策を採ったが、次代の義教と後小松との関係は特に良くなかった。

この点に関して、後小松側にも重要な問題点があった。それは称光天皇が病弱で継嗣が生まれず、弟（小川宮）を東宮にたてていたが早世し、他に皇子のいない後光厳皇統は断絶の危機にあった。つまり、北朝にも皇統分裂の危機は存在した。もともと光厳皇統の正嫡は崇光天皇であったが、光厳は花園の皇子の直仁を猶子にして光厳の皇太子にたてた。光厳は花園に終生恩義を感じていたらしいが、実は直仁は光厳と花園の妃の間の子という説もある。しかし、彼女が尊氏の妻の姉妹にあたため、光厳は幕府との関係から直仁の皇統が皇位を継承することを考え崇光の皇太子に立てたという説が有力である。そうすると崇光も中継ぎの「一代の主」となった可能性があった。しかし、観応の擾乱の結果、北朝は治天の君である光厳上皇、光明上皇、崇光天皇、皇太子直仁らが南朝に拉致され吉野に連れ去られ壊滅状態となった。その過程で尊氏は南朝に一時帰順したため崇光天皇、皇太子直仁は廃位された。正平の一統である。しかし、それは尊氏にとっては対直義戦の戦術で過ぎず、すぐに破られて尊氏は出家前で南朝が見逃した光厳の第二皇子弥仁（崇光の弟）を皇位に付け北朝を再建した。これが後光厳天皇である。以降、この皇統が後円融―後小松―称光と続いたわけである。しかしその後、南朝が衰微して講和の機運が生じて、光厳、崇光、直仁らは京都へ帰還した。（光明はそれ以前に帰京している。）これ以降、皇位を継承してきた後光厳皇統に対して、兄の崇光が持明院統・北朝の嫡流として子息への皇位継承を主張し、北朝内部で対立が生じることになったのである。（その背景には長講堂領など王家の荘園群の相続問題もあった。）崇光の子息栄仁は伏見宮家を創設したが皇位継承の可能性は極めて低かった。幕府は基本的に後光厳皇統を支持していたからである。しかし、称光の皇嗣不在のために崇光皇統（伏見宮家）から崇光の孫貞成（伏見宮家第三代）の子息彦仁王が、後小松の猶子となって踐祚した。後花園天皇である。つまり、皇統は後光厳皇統から崇光皇統へと再転換したのである。その背景には將軍義教と後小松との不仲、義教の貞成への支持があった。

南北朝統一後、特に北朝の天皇と足利將軍の關係が重要であるが、それを「儀礼的昵懇關係」ととらえその



図Ⅲ 北朝天皇系図

実態を、天皇側は將軍に経済的にも政治的にも全面的にもたれかかる依存関係、將軍（幕府）側は自らの正当性の源泉として天皇を支える『王家』の執事』としての振る舞いと理解する考え方は実証的にもかなり説得的である。²⁷⁾ たしかに、北朝、就中、後光厳皇統は尊氏によってたてられ、その目的は幕府に正当性を付与するためであつたし、北朝は將軍（幕府）に全面的に依存することによって命脈を保ってきた。そして將軍は程度の差はあれ『王家』の執事』として物心両面で北朝を支えた。この関係は、パラサイトする王家とその宿主としての將軍というとらえ方もできようが、この両者は、むしろ互いに互いを必要とする「共棲関係」ととらえた方がよいような気がする。要はそれを中世国家論、権力論としてどう描くことができるかであろう。この意味において、後小松↓称光↓後花園という皇位継承をめぐる後小松と貞成それぞれの正統意識の問題は、室町將軍との関係も含めて説明する必要があるがそれについては他日を期したい。

〔註〕

はじめに

- (1) 「中世初期の皇統転換をめぐる歴史認識と政道観の諸相―承久の乱を史論・物語はどう描いたか」(『流経法学』第二二巻第二号所収)

第一章

- (1) テキストは『群書類従』第二〇輯所収のものを用いた。『梅松論』の異本の異同については、小川信「『梅松論』諸本の研究」(岩崎小彌太博士頌寿記念会編『日本史籍論集』下巻所収、吉川弘文館、一九六九年)、「武田昌憲『梅松論』の成立に関する一考察」(『中世文学』第三七号、一九八七年)、および新撰日本古典文庫8『梅松論・源威集』(現代思潮社、

- 一九七五年)の加美宏・森秀人「梅松論解説」を参照した。また、『梅松論』の研究については福田景道「梅松論」の基幹構想―「將軍」と「正統」―などを参照した。
- (2) 石毛忠「南北朝における天の思想―『梅松論』をめぐる―」(『日本思想史研究』創刊号、一九六七年)参照。
- (3) 古典文学大系35『太平記』第二卷、五六―五七七頁参照、岩波書店。なお、南北朝期の武士の天皇観については田原嗣郎「南北朝期における武家の天皇観」(『季刊日本思想史』第一〇号、ベリカン社、一九七九年)参照。
- (4) 『群書類従』第二〇輯、一六九頁、「延宝本」とは細部の言葉違い(漢字、仮名、句点など)は相違しているものの文意は同趣旨。以下同じ。『梅松論・源威集』七三―七四頁参照。
- (5) 一四六頁。
- (6) 一四六頁。
- (7) 同前。
- (8) 前掲石毛論文によれば、『梅松論』と極めて近い内容を持つ『明恵上人伝』には義時の「其れ先蹤なきに非ず。周の武王・漢の高祖已に此義に及ぶ歟。其れは猶自ら天下を取りて王位に居せり。是は関東若し運を開くと云ふ共、此の御位を改めて別の君を以て御位につけ申すべし。天照太神・正八幡も何の御とがめかあるべき。」との発言を記している。「其れ」＝周武王、漢高祖はともに易姓革命により新王朝を建てた例であるが、「是」＝義時は「天命」にそわない天皇を廃して別の天皇を立てる。それは天照太神・正八幡の意志にそうたものである、という主張である。(前掲石毛論文、七頁参照。)易姓革命と日本の幕府が「別の君を以て御位につけ申すべし」ということを並べて「其れ先蹤なきに非ず」と述べているわけであるから、「疑似易姓革命」論といってもよいかもしれない。
- (9) 前掲石毛論文、五頁、文治二年とは頼朝と義経の対立が深刻化して頼朝追討の院宣が出たころである。もともと『吾妻鏡』では承久の乱の勃発時には義時も朝廷への戦意が高かったわけではなく、大江広元ら文官たちからの叱咤激励と短期決戦の意義を説かれて決意を固めた様子が描かれている。とすれば、一二三二(承久三)年の承久の乱を経て『吾妻鏡』と『梅松論』のような記述の差＝意識の差が生じたことになる。やはり、前稿で述べたとおり、承久の乱での武士の勝利はその意識の変化の画期をなす出来事であったということが出来る。

- (10) 以上、前掲『群書類従』第二〇輯、一四四～一四五頁。
(11) 一四七～一四八頁。
(12) 一四八頁。
(13) 同前。
(14) 一四九頁。
(15) 一四八頁。
(16) 一四九頁。
(17) 同前。
(18) 一四九～一五〇頁、また「∴(中略)∴」の部分は各天皇の在位期間が記されている。
(19) 一五〇頁。
(20) 一五〇～一五一頁。
(21) 一五一頁。
(22) 同前。
(23) 一五二頁。
(24) 一五六頁。
(25) 一五七頁。
(26) 一六二頁。
(27) 一六三頁。
(28) 同前。
(29) 同前。
(30) 一六四～一六五頁。
(31) 一六七～一六八頁。

- (32) 一七九頁。
- (33) 一八二頁。
- (34) 以上、一八三～一八四頁。
- (35) 一九七頁。
- (36) 同前。
- (37) 一九七～一九八頁。

第二章

(1) テキストは日本古典文学大系87『神皇正統記 増鏡』(岩波書店)所収のものを用いた。一二五頁。『神皇正統記』の研究は近年著しく進み、我妻建治『神皇正統記論考』(吉川弘文館、一九八一年)や玉懸博之『日本中世思想史』(ベリカン社、一九九八年)などのすぐれた研究が出てきており、本来ならそれらの業績を踏まえた議論が必要だが、本稿では『正統記』において、「正統性」が「正理」によって発現する論理的プロセスに要点をしばって考えを述べた。より詳しい検討については他日を期したい。

- (2) 一二二～一二三頁。
- (3) 一二四頁。
- (4) 一二四頁。
- (5) 一二四頁。
- (6) 一二四～一二五頁。
- (7) 九〇頁。
- (8) 以上、同前。
- (9) 一二五頁。
- (10) 一二五頁。

- (11) 一〇七頁。
 (12) 一〇八頁。
 (13) 一〇八頁。
 (14) 一六二頁。
 (15) 一六五頁。
 (16) 七七頁。
 (17) 七六頁。なお、世数については重要な先行研究があるが、それについてはさしあたり松山和裕『神皇正統記』における世数表記についての考察」(『日本思想史研究』第四三号)を参照されたい。筆者の考えは本稿のとおりである。
- (18) なお、継体天皇以降、兄弟相続した天皇の中で世数を与えられている天皇の正統性(正理に反る)に関する記述を検討すると、三〇代、二一世の欽明天皇の項に「両系マシシカド、此ノ天皇ノ御スエノ世ヲタモチ給。御母方モ仁徳ノナガレニテマシマセバ、猶モ其遺徳ツキズシテカクサダマリ給ケルニヤ。」(九二頁)との記述が注意をひく。両系とは、二八代安閑・二九代宣化と、三〇代欽明のことを指すと思われる。ここは二朝並立説もあるほどだが、欽明の母は二六代武烈の父二五代仁賢の女である。本文継体天皇のところであつたように、「悪王」武烈で断絶した皇統の始祖仁徳には世数はふられていない。しかし、欽明の母が仁徳皇統の血を引くことが「猶モ其遺徳つきずしてかくさだまり給けるにや。」とあり、「其」が仁徳を指すことは明らかでその遺徳が欽明の正統性を担保しているのは論理的一貫性を欠いているようにも思われる。
- 同様に注意をひくのは、三一代、二二世敏達天皇についての記述である。敏達は世数がふられているので以降の皇統の始祖である。しかし、そこでは敏達が欽明の第二子であることと母が宣化の女であることが記されているだけで、記述の大半が弟の三三代用明天皇に厩戸皇子(聖徳太子)が生まれて、様々な奇瑞があらわれ「たゞ人にまします。」と述べるなど奇妙な記述になっている。実は、これは後の舒明天皇の正統性で重要な役割を果たすことになる。そして三三代用明以降、三三代推古、三三代崇峻と四人が兄弟相続(この三人の皇統は続かないので当然世数はふられない)し、皇位は一世とんで、三五代・二四世の欽明天皇につながってゆく。一世とぶのは崇峻が殺された後、敏達の子で即位しなかった押

坂彦人大兄皇子が二三世と認識されその子の舒明が即位したからである。母が敏達の子であるが、ここでも推古は聖德太子の子に皇位継承させようと考えたと記され、「されどまさしき敏達の御孫、欽明の嫡曾孫にまします。」と述べ、世数をふられた敏達、欽明の嫡系であることが舒明の正統性を担保しているという論理構造になっている。さらに聖德太子が病気の時に推古は舒明（即位前）を使いとして見舞いをさせた時「天下のことを太子の申付給へりけるとぞ。」と「ただ人ではない」聖德太子から天下のことを頼まれたと、聖德太子が正統性を合わせて担保している論理構造になっている。

以上のように見てみると、欽明皇統は、仁德皇統との婚姻がその正統性を担保し、敏達―舒明皇統は、二朝並立説はともかくも、安閑・宣化皇統との婚姻がその正統性を担保し、舒明は聖德太子からの「遺命」がそれを補強しているという論理構造になっている。こうした記述は、仁德皇統も安閑・宣化皇統も皇統は男系では断絶したが、それを支持した勢力が存在し力を持っており、欽明―敏達―舒明皇統はそれらとの婚姻を通じその間にできた皇子が即位してはじめて安定が得られた事実を反映していると考えられる。また、三六代皇極天皇は二三世と認識されている押坂彦人大兄皇子の子茅渟王の子（三六代孝德天皇は同母弟）であるが、「敏達の曾孫也。」と敏達が正統性を担保している。前述のように、その敏達の記述に「正統」でない聖德太子の誕生が特記されていて舒明の正統性を補強していることも論理的には一貫性がないようにも思われる。

こうしてここまで正統性をたどってきたが、正統な舒明と皇極の間の子である三九代、二五世天智天皇の正統性は「血統的」にはアブリオリに担保されているということになるが、『正統記』の正統概念は本文で明らかにしたように「道徳的」要素も強く含まれると考えられることに注意したい。なぜならば、天智は「此天皇中興の祖にまします」とある後に括弧書きで（光仁の御祖なり）と光仁皇統の始祖にあたる ことが述べられているからである。その論理の意味は本文を参照されたい。

(19) 一六四頁。

(20) 一六二頁参照。しかし、前稿で指摘したとおり、後鳥羽皇統の正嫡は順徳―懐成（仲恭）であったが、承久の乱の結果この皇統は幕府によって排除され、土御門の子である後嵯峨が泰時によって選ばれて（「発見」されて）践祚・即位してはじめて土御門は正嫡化（正統化）されたのである。この点、前稿で後嵯峨の後鳥羽との関係における土御門正嫡化の問題

として明らかにしたので参照されたい。(拙稿「中世初期の皇統転換をめぐる歴史認識と政道観の諸相」承久の乱を史論・物語はどう描いたか」一〇九頁、および一八一頁一八四頁参照) もともと土御門が正嫡であったから後嵯峨が踐祚・即位したわけではない。この親房のいう「正理」発現の論理を筆者は倒立と理解した。また、親房が泰時を評価するのは順徳皇統ではなく土御門皇統を「発見」し即位させたからであろう。なぜならそれが南朝の源流であるからである。

(21) テクストは日本思想体系22『中世政治社会思想 下』(岩波書店) 所収のものを用了。

(22) 以上、「奏状」の研究史に関しては村井章介「吉田定房奏状はいつ書かれたか」(『日本歴史』第五八七号)、呉座勇一「陰謀の日本中世史」(角川書店) 等を参照した。

(23) 前掲『中世政治社会思想 下』一四九頁、なお原文は漢文であるが、引用に当たっては編者による書き下し文によった。

(24) 同前。

(25) 以上、同前。

(26) 一四九頁一五〇頁。

(27) 一五〇頁。

(28) 同前一五〇頁一五一頁参照。

(29) 一五一頁。

(30) 同前。

(31) 一五一頁一五二頁。

(32) 一五二頁。

(33) 一五二頁一五三頁。

(34) 一五三頁一五四頁。

第三章

(1) テクストは日本古典文学大系87『神皇正統記 増鏡』(岩波書店) 所収のものを用了。四〇二頁。なお亀山と忠子の関

係について『増鏡』の記述を採用して書かれたのが村松剛『帝王後醍醐 中世の光と影』（中央公論社、文庫版、一九八一年）である。

- (2) 兵藤裕巳『後醍醐天皇』（岩波新書、一八頁）。
- (3) 森茂暁『後醍醐天皇』（中公新書、二九～三〇頁）。
- (4) 前掲日本古典文学大系87『神皇正統記 増鏡』、四〇一頁参照。
- (5) 前掲書三五九頁参照。ただしそれは亀山ばかりでなく、後深草も同様。
- (6) 黒田俊雄『日本の歴史』第八巻、「蒙古襲来」、三四三頁「天皇家の惣領（2）」参照。
- (7) 前掲日本古典文学大系87『神皇正統記 増鏡』、三七九頁。
- (8) 黒田前掲書、三二八～三二九頁。
- (9) 三三七頁。
- (10) 『増鏡』第一「さしぐし」前掲日本古典文学大系87『神皇正統記 増鏡』、三九九頁。
- (11) 森前掲書、四六頁参照。このうち、後嵯峨は四条天皇が在位の間は即位の可能性がほとんどなかったので立親王も立太子もしていないし、元服も二三歳と異例である。また、伏見は立親王が一歳と後醍醐に次いで遅いが、後宇多が後嵯峨の意思で亀山の皇太子に立てられたので、その時点では即位の可能性が低かったためであると思われる。この図から後醍醐の例外性がよく分かる。
- (12) 『鎌倉遺文』第二九卷、二〇〇頁、二二二九八「亀山上皇置文」。
- (13) 森前掲書、三八頁。
- (14) 『群書類従』第五輯、三七〇頁。
- (15) 以上、『花園天皇宸記』第二卷、七一頁、なお、「後聞く」云々はこの日の条の最後に「」付けで書かれており、文字通り後で書き足し挿入されたものであるう。
- (16) 『神皇正統記』では「鶴膝ノ御病」と記している。森は小児マヒであろうと推測している。森前掲書、五二頁参照。
- (17) 森茂暁『鎌倉時代の朝幕関係』所収、一九九一年、思文閣出版、ただしこの事書案は提出されなかったと思われる。

- (18) 二四九頁。
- (19) 二四九～二五〇頁。
- (20) 以上、「二三三六九 後宇多上皇讓狀案」、「鎌倉遺文」古文書編第三〇卷所収、三二〇～三二一頁。
- (21) 『花園天皇宸記』第三卷、七五頁、一三二四（元亨四）年六月二五日条。
- (22) 『増鏡』第一三「秋のみ山」、四二〇頁。

第四章

- (1) この点に関しては村井章介「易姓革命の思想と天皇制」（『講座前近代の天皇』第五卷所収、青木書店、一九九五年）が詳しく問題点を採り上げていて本稿でも参照した。
- (2) 前掲『花園天皇宸記』、第二卷、二二〇頁、元亨二年二月一二日条。および兵藤前掲書四〇～四二頁参照。
- (3) 前掲兵藤『後醍醐天皇』一六〇頁参照。また、兵藤は「讖緯說批判と宋学」という項をたてて、宋学受容のメルクマーとされているが、この点については判断を留保したい。（三一～三三頁）
- (4) 和島芳男「中世における宋学の受容について」、「『帝国学士院紀事』第五卷二三号」、「中世宋学史の諸問題」、神戸女学院大学『論集』、第一二卷二・三号など参照。
- (5) 『群書類従』第九輯所収、五一〇頁。
- (6) 新田前掲書、四六頁。
- (7) 前掲「中世における宋学の受容について」、「『帝国学士院紀事』第五卷二三号、一二〇頁。
- (8) 下川玲子「北畠親房と宋学——『大学』・『中庸』の受容をめぐって——」七五頁。
- (9) 前掲和島論文、一二二頁。
- (10) 前掲新田、四七頁。
- (11) 前掲兵藤、一六四頁。
- (12) 前掲新田、五〇頁。

- (13) 『日本史研究』三一四号、一九八八年一〇月。
- (14) 二七頁参照。
- (15) 以上、二八～二九頁参照。
- (16) 三一頁。
- (17) 以上、三二～三三頁参照。
- (18) 三七頁。
- (19) 同前。
- (20) 以上、四〇～四二頁参照。
- (21) 前掲兵藤、一六〇頁参照。
- (22) 『群書類従』第五輯所収、六二七頁。なお原文は漢文。以下同じ。
- (23) 岡野友彦『源氏と日本国王』、講談社、二〇〇三年、卷末所収の「源氏長者一覽」参照。
- (24) 前掲森、八四頁参照。
- (25) 同じく『職原抄』では、「奨学院別当」の項に「源氏の公卿第一の人、これを称す。納言たるの時、多く奨学・淳和の両院を兼ね、大臣に任ずる日。淳和院を以て次の人に与奪す。奨学院においてはこれを帶す。」とある。前掲『群書類従』第四輯、六二七頁。
- (26) 『看聞御記』については横井清『看聞御記「王者」と「諸庶」のはざまにて』（一九七九年、そして刊）を『椿葉記』については『群書類従』帝王部所収のものを参照した。
- (27) 石原比伊呂『北朝の天皇「室町幕府に翻弄された皇統」の実像』（中公新書、二〇二〇年）参照。ただ、本書はおもに天皇個人の個性と將軍の個性の「相性」の面から両者の関係をとらえている点は理解しやすいが、政治論・権力論の視点からはやや疑問が残る。